

汝は魔法少女なりや？

花極四季

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、魔法少女の自己犠牲によって導かれる物語ではない。
子供の未来を護るのは、いつだって大人の役割だ。

目次

灰塵独唱 | Flame was born from the a

shes |

魔法少女は灰塵と共に | 1

皇凱虎の日常 | 15

運命の収束 | 26

偶然と必然 | 37

望まぬ邂逅 | 58

灰塵独唱—Flame was born from the ashes—

魔法少女は灰塵と共に

唐木仏壇からきぶつだんを前で鉄柱のような背筋で正座する少女。その眼前には家族である父と母、そして妹の遺影いえいが立っている。

静謐せいひつな空間の中で音一つ立てずに目を伏せてから数秒。蠟燭ろうそくに火を灯し、その火で線香を焚く。

幾度と繰り返し返された工程。ゆらゆらと揺れる蠟燭ろうそくの火と、その奥にある遺影いえいを見て脳裏に必ず浮かぶのは、業火によって建物が焼くべられていく光景。

それは、少女が正しい意味で天涯孤独となってしまうた日に起こった悲劇。

業火と共に倒壊していく建物の中、妹の亡骸なきがらを必死に護ろうと身ひとつで足掻いた結果、それを護り通すことは叶ったが、全てが元通りとはいかなかった。

むしろ、失うものの方が圧倒的に多く、単純な足し引きでいえば圧倒的に損が勝る結果となっていた。

それでも、少女の心の中には一片の後悔も生まれることはなかった。

魂が抜け、妹ではなくただの死体でしかないそれを、何故そこまでして護り抜こうと思ったのか。

冷静かつ合理性の塊と言える少女がそのような無駄を敢行かんこうしたのは、手を取り合い苦楽を乗り越えてきた過程によるものか。

今日に至るまでの間、科学はさも当然のように発展し、それにより食糧問題が解決し戦争が徐々に鳴りを潜めてきたと同時に、人口の増加によって未開の土地に手を付けなければ生存圏が確保出来なくなってしまうていた。

科学の力によって荒れた土地も再生し、地球全体を見て明確な貧富の格差が生まれるようなことはなくなり、人類が安定して生きられる

ようになった、そんな矢先の話である。

後に『終焉災害』と呼ばれる、地球規模の災害が発生した。

『終焉災害』が発生してからはや数年。ある日突然、妹のための薬を探すために遠出をしていた父と母が行方不明となり、心構えを持つ暇もないまま病を患った妹と二人だけになってしまった。

行方不明としてはいるが、その向かった先で巨大な台風が出現したという風の噂を聞いており、その情報から半年が経過した時点で、恐らくは巻き込まれたものと判断せざるを得なかった。

地震、台風、豪雨——言葉だけ見れば珍しくもない災害。しかし、その規模が異常だった。

地震はマグニチュード7程度当たり前、台風も平均1000ノットと、そんな規模の災害が周期的、時には突発的に人類に牙を剥いた。

必然的に、それらに対して身を護る手段を持たない小さな村から街はなすすべもなく滅んでいき、地殻変動によって世界地図は大きく塗り替えられ、大国と称された国であろうとも崩壊していくという光景も決して珍しくはない状態となっていた。

少女が生まれた国である日本もまた、『終焉災害』によって半壊。日本に住む人々は生活できる環境を失ったことで、平穏な日常から切り離されることとなってしまった。

日本国民の大半は、『終焉災害』発生以前より各地に建設されていた巨大地下シェルター『雨宿り』を新たな居住地として生活をしている。

自給自足を可能とした設備を初めとして、閉鎖的な空間ながらも天然自然の溢れる景観を実現させており、地下シェルターのネガティブなイメージとは縁遠い、安らげる空間を現実のものとしている。

しかし『雨宿り』の名の通り、本来そこは永住を目的とするための施設ではない。

あくまでも一時しのぎの避難所として提供されている施設であるため、路頭に迷った人間すべてを養えるほどの規模はない。

各地に点在する『雨宿り』をすべて集結させたとしても、国民が健全な生活を保障できるのはせいぜい三分の二が限度だと言われている。

そうなるに当然、安全というチケットを掴み損ねる人も生まれる。少女とその家族もまた、その権利問題で地上に残らざるを得なかった被害者である。

国——否、世界的な危機において、人民全てが平等に権利を享受できるなんてことはない。

『雨宿り』に避難する権利に関しても例外ではなく、あらゆる分野での技術者が重用される中で、即戦力たり得ない技能や、そもそも働けない子供や老人に至っては、極端ではないにしてもやはり優先順位は劣る扱いをされていた。

日本が傾かんとしている状況だという理性的な見解を持ちつつも、そんな未来よりも明日を過ごす平穏を望む気持ちは両立する。

故に、居住権を巡りたいざござは散見しており、そんな状況を嫌い敢えて残ったというのがひとつ。

もうひとつは、最初の理由にも関わることだが、妹が病を患っているという点。

病人は、働けない子供や老人以上に疎まれる存在。病を治療するにも安定させるにも薬という貴重品を摂取する必要がある、そこまでしても利益としてはプラスにはならない。

労働力にもならず、物資を消耗させるだけの置物に、自分の命を犠牲にする覚悟で席を譲る人間が果たしてどれだけいるだろうか。

何千と収容される閉鎖的な施設の中で、不満の種をたつたひとつづえ付けてしまえばどうなるかなど、想像に難くない。

ましてや、これは努力で改善できる問題ではない。現代の医学を持つてしても、安定させるのが精いっぱい肺炎のような症状。厄介者として扱われるのは必然だった。

不満の捌け口はにされることが目に見えている状況、その中心となるぐらいならば地上で過ごした方がまだ安全で精神衛生上マシであると家族で判断した結果が、少女が自宅で過ごしている理由である。

その決断は、彼女が孤独となつてなお変わらずに残り続けている。それだけが、唯一彼女に残された家族との繋がりがりだから。

『——アスカ、反応をキャッチしたよ』

鈴の鳴るような声と共に、アスカと呼ばれた少女の隣に、火で横つた鳥のようなものが現れる。

名前は『フェネクス』。不死鳥と同じ名を持つ炎の精霊であり、彼女が今こうして生きている理由そのものである。

フェネクスとの出逢いは、妹の死体を埋葬しようと廃墟の教会に訪れた日に遡る。

自宅で静かに息を引き取った妹をまともな場所で弔おうとし、唯一見つけたのがそこだった。

開拓に開拓を重ねられた近代において、今も確かな形を残していた郊外の丘上に建てられたそれは、何故か『終焉災害』の被害を欠片も感じさせないほどに、土地も建物も綺麗に残されていた。

あまりに都合がよすぎる条件の立地に奇妙なものを覚えつつも、妹の苦しみを一度も癒せなかった彼女はせめてもの手向けとしてそこを墓標にしようと決断した。

石造りの祭壇の上に教会の裏に咲いていた、色とりどりの花を敷き詰めてベッドとし、最期の別れをしようとした瞬間、教会が業火に包まれ、同時に地震も発生したことで瞬く間に教会内に閉じ込められた。

そうして死を覚悟したアスカの前に現れたのがフェネクスだった。

「そうか」

フェネクスの言葉に、アスカは眉一つ動かすことなく相槌を返す。

少女然としていない雰囲気纏う身体を軽く動かし、一度軽く呼吸を整えた後おもむろに立ち上がり、部屋を出ようとする。

部屋から出る一瞬、自分と瓜二つな妹の遺影を見つめ、僅かな躊躇いを取り繕いながら踵を返した。

外は深夜。耳をつんざく静寂と星々の小さな輝きが、彼女の出陣を歓迎する。

声なき漆黒の中、アスカは火の鳥を掌に添える。

「――還り咲け『焰塵』」

眩くように言葉を紡いだ瞬間、アスカの周囲に炎が逆巻く。

炎はアスカの身体に巻き付いてくと、次第に形を変えていく。

炎の揺らめきを想起させる色合いのロングスカートに、肘まで伸びた紅色の手甲。そして火の鳥を握っていた手には、太陽を模った寶石を先端に付けた身の丈ほどもある巨大な杖『陽片』ミイテイアが出現する。

ファンタジーが現実^に落とし込まれたような光景。それは言葉通りの現実を指し示していた。

魔法少女。

彼女こそ、誰も知れぬ希望の欠片^{かけら}。

『終焉災害』エンドマークを止めることが出来る力——魔法の力を行使できる少女その人である。

力強く大地を蹴り上げ、勢いのまま飛翔する。

自己を媒介とする魔法は、魔法の中で最も簡単な部類に入る。

一年間という実績のあるアスカにとって、この程度は呼吸するのと何ら変わらない。

『北西に複数のイマジナリ反応！』

「分かっている」

荒々しい魔力反応を辿っていく内に、目標のポイントに到着する。

そこには、『終焉災害』エンドマークによって倒壊し、復興の目途が立っていない廃墟しか映らない。

だが、それは常人の感覚であって、魔法少女にとっては確かにそこにいるのが分かる。決して見逃せない、無色の悪意による怪物が。

『位相結界』イミテーション・プリズン起動

『陽片』ミイテイアの石突部分で地面を小突くと、コンクリートの焼ける音と共に、炎環が波紋となって実と虚の線引きをしていく。

広がる位相結界に、先程感知した魔力反応が触れると、何もなかった筈の場所に徐々に黒い靄でできた輪郭が、泥人形が如く歪に形取っていく。

「虚数座標固定。結界を自律モードへと移行完了。これより戦闘を開始する」

魔法の詠唱とは違う、再確認の為だけの復唱。

幾度と繰り返し返してきた工程は、死地に立つ戦士とは思えないほど無機質で、どこまでも作業的な雰囲気伺える。

しかしそれ故に、結界に一切の綻びもなければ揺らぎもない。完璧と言つて差し支えない、実と虚の狭間に出来た牢獄。

虚数空間に結界を張ることで現実世界と同じ環境を再現し、虚数空間に存在する生命体『イマジナリ』を実数体として捕捉している。そうしなければ対消滅が起こつてしまい、跡形も残らずに虚数の海に沈んでしまう。

つまり、この結界は彼らを逃さないための檻であると同時に、宇宙服のような役割も担っているのである。

この空間が消える条件は、術者が任意で解除するか、術者が死亡した時のどちらかしかない。

つまりイマジナリがこの牢獄から脱出するには、アスカを打倒する以外ないということである。

『『G a a a a a a a a a a ! !』』』』』

偏在した獣の咆哮が炎の牢獄に響き渡る。

眼前に姿を現した無形の獣。これこそイマジナリと呼ばれた虚数生命体の正体であり、魔法少女が打倒すべき不倶戴天ふぐたいてんの敵。

その姿は、例えるならば熊ほどの大きさをした狼だろうか。それが一つの影から全く同じ造形で分散していく。

マイナスで構成された獣に本能があるかは甚だ疑問ではあるが、アスカを敵と断定した獣はその喉笛を噛み切らんと虎視眈々と機会を伺っている。

一度押し倒されようものならば、鬪り殺しにされるしかない。アスカとの体格差を考えれば、本来なら戦うという選択肢さえも浮かぶはずもない。

そんな化け物と対峙してなお、アスカに動揺は無い。

『数は20体、全部タイプブリーストだね。空を飛ばば危険は少ない相手だけど、油断しないでね』

「ああ」

フェネクスの指示に従いにアスカは空中に移動すると、杖の先端を

獣達へと向ける。

魔力を杖先に集中させ、それを散弾のように発射。タイプピースと呼ばれる獣形態のイマジナリは、それぞれ四方に散会し回避を行う。

しかし、回避した先に着地した瞬間、その内の一体の身体が発火を引き起こす。

業火に悶え苦しむ獣に、間髪入れずに駄目押しの魔法弾を食らわせる。

「二体目」

弾幕の撃ち込む角度を計算に入れ、イマジナリが回避する方向を誘導。予想着地点に置く形であらかじめトラップを仕込んでおくことで、次々と業火の塵と化していく。

アスカの魔法少女としての適性は限りなく低い。

フェネクス曰く、アスカは標準の魔法少女と比較して魔力変換効率 は半分以下。単純に倍の時間を掛けなければ、標準の魔法少女と同等の火力を出せないという致命的な弱点を抱えている。

だが、それを補って余りある戦術眼と情報処理能力によって、未知の相手であろうとも的確な判断で戦うことが出来る。

本人の才能もあるが、何よりも彼女が孤独な戦いを強いられていたからこそ、必然的に身に付いた能力である。

そうでなければ、武道の一切を嗜んだ経験のない素人が、誰からも戦いの何たるかささえ学ぶことなく一年も死線を潜り抜けられるわけがない。

「二体目、三体目、四体目——」

淡々とキルスコアを呟き一方的に仕留めていく姿は、歴戦の戦士、あるいはハンターのそれ。

少女の鋭い眼光は、一切油断なくイマジナリを見据える。それが例え業火に焼かれ力尽きたとしても、消滅するまでは常に視野角の中に収めるように立ち回る。

それはひとえに、己の弱さを自覚しているが故の行動。

事実、彼女は無傷ではあるが、魔力に関しては最早限界に近い。

少ない魔力をいかにやり繰りして、最適解を常に導き出し、ようやく互角。

むしろ、少女の肉体では一撃でもまともに攻撃を食らえば耐えられないであろうことを考慮すれば、この優位は薄氷そのもの。

だからこそ、攻撃の手を緩めることはない。

斃り殺すぐらいでなければ、此方が斃り殺されるだけだから。

「終わりだ」

最後のイマジナリが消滅するのを見送ったと同時に、結界もまた役目を終えて消滅する。

それに伴い、アスカも魔法少女の姿を解除する。

「お疲れ様」

「……問題ない、いつものことだ」

「それでも、ね。アスカの戦いは秘匿されるものである以上、誰にも称賛されることはない。だからこそ、ボクぐらいは労ったつていいじゃない」

魔法少女の戦いは、表立って行われているものではない。

イマジナリは虚数空間でしか存在できない為、虚数空間に入り込める魔法少女でしか観測できない。

それ故に、その功績は大衆に知られることはない。

イマジナリは、誕生した瞬間から現実世界に干渉しようとする習性を持つ。

膨大な虚数エネルギーの塊であるイマジナリが現実世界に出現した瞬間、虚数エネルギーがそのまま実数に変換され、自然界に還元される。

しかし、そのエネルギー量が膨大過ぎるせいで、さながらバケツの水をコップで受け止める要領で溢れかえってしまう。

その余剰分のエネルギーこそ『終焉災害』^{エンドマーク}の正体、らしい。

確証がないのは、情報源がフェネクスという言葉だけであるという信憑性の欠如にこそある。

しかし、それ以外に納得できる材料はないため、とりあえずはそうであると納得するしかない。

『終焉災害』は時間が経てば自然と霧散して自然にエネルギーとして還元されていくが、その間に出る被害は凄惨たるもの。

一度『終焉災害』としてエネルギーが解放されてしまえば、如何に魔法少女といえど止めることはできない。

本物の災害を前には、如何な奇跡であろうとも太刀打ちはできない。ましてや個人の力であるならば猶更のこと。

身も蓋もない話だが、魔法少女とは既存の軍事力を遥かに凌駕するような存在ではない。

時代が移り変わろうとも、生物は脳や心臓にダメージを当たれば簡単に死に至ることは変わらない。

効率だけを求めるのであれば、魔法弾一発とピストルの一発が同程度の威力であると仮定して、どちらが効率的であるかなど考えるまでもない。

虚数空間に干渉できるのが魔法少女だけという制約がなければ、こんな非効率的な行動は誰も取ろうとはしないだろう。

故に、魔法少女の仕事とは『終焉災害』が発生する前に虚数空間に潜り込み、原因であるイマジナリを倒してエネルギーを霧散させること。それに尽きる。

「私は出る杭を打っているだけだ。身に降りかかる火の粉を払うのは自然なことだし、それが例え誰かの救いになろうとも、それは結果論に過ぎない」

『……ふ〜ん』

「言いたいことがあるなら言え」

『いや、今日はいつもより遠くまで来たなあって。ほら、あそこアスカが通ってる学び舎がある』

フェネクスの視線の先には、所々の損耗が見受けられる素朴な校舎が建っている。

この周辺一帯に限って言えば『終焉災害』の直接的被害はアスカの活躍によって免れているが、ならば安全だということは一切ない。

度重なる地震による交通網の破損、それに伴う次善としての空路も、予測困難な台風によって安定せず、物資の補給もままならない。

あの校舎も今や勉強をする場所というよりも、避難所と言った方が正しい。

家屋を失った家族、身寄りを失い路頭に迷う子供、一人で生きるのが困難な老人、それぞれの理由から身を寄せ合って生きている者達の溜まり場。

アスカも本来ならばそこに居るべき立場だが、あの家から出ていく気は無い。

性格上、あまり集団行動を好まない性質故に、自活できる程度に実家が無事であるならば、多少苦労してでも他人とは距離を取りたいと考えている。

それに、アスカはとある理由から魔法少女である事実を秘匿することを絶対としている。それこそ、アスカの人生を左右するほどの重い理由がそこにはある。

そんな私情を抜きにしても、魔法少女という摩訶不思議な存在を秘匿するのは合理的な判断であるため、フェネクスも彼女の判断に口を出すことはない。否、出せない。

『……帰らないの?』

「少し、様子を見てくる」

静かにそう告げると、フェネクスの返答も聞かずに、アスカは静かに校舎の窓から漏れる光へ向けて飛び立つ。

夜の帳に身を隠しつつ、窓から中の様子を観察する。

所々に綻びの目立つ一室に、デスクに向かってパソコンを操作している女性の姿が見える。

疲れた表情を取り繕うこともせず、しかし作業の手を止めることなく続けている。

彼女の名は「幸節結花」。凶らずもこの校舎を取り仕切る立場となつてしまった、責任感の強い女性。

元々この校舎で教師として働いており、人当たりの良さと三十を超えてなお若く美しい姿も相まって、結構な人気者であつたらしい。

『終焉災害』による破滅の波が押し寄せていく内に、学び舎としての維持ができなくなるほど教職員が離れていき、その代わりに新たに避

難所として生まれ変わった中、彼女だけは最後までこの場に留まり続け、そうして今に至っている。

詳しい事情は知らないが、彼女の人の好きが災いし、避難民達を見捨てることができなかつたであろうことは想像に難くない。

流石にすべての作業を彼女ひとりでやってはおらず、少数ながらも大人も滞在する中で分担作業を行ってはいるが、この校舎の全容を一番把握しているのは彼女だけということもあり、やはり負担の比重は彼女に大きく傾いている。

今もこうして、物資の在庫などのチェックを夜中まで続けているのを見れば、まともに就寝できるのは深夜近くとなろう。

それでも避難民や子供達の前では弱音どころか疲労も一切見せることがないのだから、大した女優である。

『そんなことしてないで、真正面から手伝いに行けばいいのに』

「下手に私に依存するような環境を作ってしまったえば、魔法少女としての行動に支障が出る。彼女の努力を応援するというのなら、私にしかできないことをやるべきだと思うがね」

『そういうことじゃないんだけど……はあ』

呆れた様子のフェネクスを尻目に、用は済んだ言わんばかりに校舎に背を向け、元居た地点で着地する。

アスカはフェネクスが自分に何を求めているのかをきちんと理解した上で、はぐらかすように無視を決め込んでいる。

フェネクスの感傷は余分なものだ。少なくともアスカにとっては。気遣いの心を否定するつもりはないが、だからといって受け入れられるかと言えば別問題である。

先程フェネクスに対しての言い分は、紛れもなく本心から来たものだ。

余計なしがらみは魔法少女として生きる中で間違いないと勘定されるので、アスカ自身が他者との積極的な交流を控えたいと考えているのならば、それは本来契約者であるフェネクスにとって噛み合ったと喜ぶべきことである。

にも拘らずこのような世話を焼こうとする辺り、本人の善性が窺い

知れる。

「明日、少し彼女と世間話をする。それが落としどころだ」

『まあ、それでいいよ』

不満げな声色ながらも納得したらしく、ならばと即座に話題を変える。

「フェネクス、それよりも周囲に生体反応は？」

『大丈夫、今居る場所なら完全な死角だよ』

「そうか」

フェネクスの言葉を聞き届けたアスカは、魔法少女としての姿を解除する。

一瞬にも満たない発光と共に、その姿はあるべき姿へと還る。

アスカが立っていた場所には、長身の男性が悠然と佇んでいた。

仏頂面で冷めた印象の瞳を持つ、二十代半ばほどの青年。雰囲気だけを捉えるならば、まさにアスカと瓜二つといえる。

それもその筈。何故ならば、彼は――

『じゃあ、帰ろうかアスカ――じゃなかった、凱虎！』

「この姿ではその名で呼ぶな。その名前は――」

『ごめん。でも僕にとっては凱虎もアスカも同じようなものだから、つい』

「それでも、その名は彼女のものだ。本来ならば、あの姿であろうとも呼ばれるべきではない。私は、妹じゃないんだ」

青年の名は、すめらぎ 皇凱虎。

皇飛鳥すめらぎあすかの兄であり、フェネクスによってその亡骸なきがらを器とし生き永らえた亡霊。そして人知れず世界の危機と対峙する、魔法少女アスカ。それが、この青年が背負う業。

終焉へ至る世界に抗う力を凶らずも得てしまった、錆び付いた心を持つ少女せいねん。

魔法少女という、本来ならば少女と定義される年齢の子供のみが得ることのできる力を使えるのは、その適性が飛鳥あすかにあったから。ただそれだけの事実。

凱虎かいとはそのおこぼれに預かっているだけの、ただの死にぞこないで

しかない。

「……帰るぞ」

平坦で低い声が、何もない世界に木霊する。

業火に焼かれた身体は灰となれども、その魂は空に昇らず。

妹の亡骸を辱めてまで生き永らえた命は、鼠色の瓦礫の街で静かに鼓動する。

喪失に喪失を重ね、唯一の心の平穏と一体となった 凱虎が選んだのは、ヒーローのように世界の危機に立ち向かうことではなく、魔法という未知の力で、かつての穏やかな家庭の名残を護るべく戦い続けるという、空虚な灰色の戦士としての道。

身近な人間でさえも手に余るというのに、何故見知らぬ不特定多数のために戦わなければならないのか。

これで彼が魔法少女として優れていたならば、少しは考えが違ったかもしれないが、現実はいつだって傾いた天秤を戻すほどの希望を与えてはくれない。

魔法の力は特別でも、自分は特別でもなんでもない。その事實は、彼に決定的な諦観をもたらした。

ならばと、今日も 凱虎は大切なものをこれ以上喪わないためだけに、偽りの自分を演じる。

それが自分が無様に生き延びた唯一の価値であると信じて疑わずに、イマジナリを倒すための歯車として自己を定義する。

その悲観的な生き方をフェネクスは止められない。

元より戦うための宿命を背負わせた分際で、それを弁えずに慰めの言葉を吐いたところで、錆びた彼の心には決して届かない。

言葉を重ねたところで、下手をすれば拗れるだけで終わりかねないほど、彼の人間性は希薄になりつつある。

ただでさえ孤独同然な彼と、今最も身近な存在であるフェネクスとの心の距離が離れるようなことはあってはならない。そうならば、完全に機械のような存在になってしまいかねない。

故にフェネクスは煤けた決意を宿す背中を、憐憫の情と共に見守ることしかできない。

”——誰でもいい。僕の代わりに、凱虎かいとを助けてください——”
無力感を胸に、願わくば彼の心を溶かしてくれるほどの変化が訪れることを祈りながら、フェネクスは一条の流星を見送った。

皇凱虎の日常

小鳥の囀りと窓から差し込む日差しによって凱虎は起床を果たす。目覚ましさえも上等な代物となった時代。文明の利器に頼らなくなった生活は、皮肉にも人間の健全性を取り戻す結果をもたらした。

『おはよう凱虎』

「おはよう」

視界外からフェネクスに見送られ、そのままベッドから起き上がる。

ベッドメイクから始まり、そのまま淡々と着替えと食事を済ませていく。

習慣化された日常の始まりを告げる儀式。そこにはかつての温かみはなく、惰性と微かに残った人間性が後押ししているに過ぎない。

食糧は絶対に絶やさないように、身体も服も可能な限り清潔に、最低でも五時間は寝ること。

それは自ら定めた決まり事ではなく、フェネクスの口うるさい諫言に渋々従っているに過ぎない。

元より凱虎としての姿は、魔法によって再構成された肉体でしかなく、少々不潔にしていたところで肉体が劣化するような仕様にはなっていない。

これはベースの肉体である飛鳥の姿であつても例外ではなく、一度魔法少女の姿になれば肉体も身に纏ったものも再構成されるため、その段階で汚れも何もかもリセットされてしまう。

節水できることに加え、衣服を調達する必要性もない。その事実を知ったときは、何もかもが不足しているこの時代において、魔法という力を得られたことを何よりも有難いと思つた瞬間であつた。

「あ、髪跳ねてる。もう、だらしない!」

「この程度、今時誰も気にしないだろうに」

「駄目だったら駄目!今日はあの人に会うんだから、そういうところは特に気を遣うの!」

「無駄に気を張っているのはお前だけだろう」

フェネクスは怒りを露わにしながらか、啞えたブラシを凱虎に差し出す。

小さく溜息を吐き、渋々とブラシを受け取り鏡の前でしつかりと整える。

フェネクスがここまで頑なな態度を取るのは、何も幸節結花と会う予定があるからではない。

こうした小さなことでも口を出していかなければ、彼は簡単に墮落していく。

死ぬ理由がないから生きている——彼の現状を指すならば、まさしくそれだ。

他人からの評価に頓着はなく、ましてや自分自身さえも雑に扱うことに躊躇ためらいはない。

過去のイマジナリとの戦いの中でも、死中に活を求める選択を取ることとはままだり、それが結果として常に最適解であったことからフェネクスもある程度黙認はしているが、いつかその選択が致命的な過ちへと繋がりそうで気が気ではないのが本音である。

『終焉災害』エンドマークが発生する以前から、皇凱虎の世界は小さく纏まっていた。

なまじ万能であつたが故に大抵のことは一人でこなせたせいで、人と人の輪を広げることへの価値を見出せず、今もこうして独りで在ろうとする。

閉鎖的な人間関係を加速させたのは、それがすべてではない。

妹の飛鳥あすかが生まれてからは、病弱だったせいで年相応な活発な人生を送ることが出来なかった彼女の為に時間を割いていたことも大きい。

青春真っ盛りな時期、ただでさえ人付き合いを好まない男が妹との時間を作る為にそれ以外を遮断してしまえば、今のような性格になるのは必然であつた。

だからこそ、フェネクスは幸節結花に一縷いちるの希望を見出している。凱虎に今何より必要なのは、人間との交流——すなわち人の温かみ

を知ること。

理由は判然としていないが、フェネクスが知る限りは家族以外に彼が大きく関心を抱いているのは、彼女以外に知らない。

故に、この機会を逃さないようにと必死に世話を焼いていた。

何せ感情自体が無自覚である可能性があるのだ。発破をかけなければ永遠に表層化しないのでは、と疑念を抱くなどという方が無理がある。

「行くぞ」

『忘れ物はない？ハンカチ、お昼ご飯、ゴミ袋——』

「問題ない」

身支度を終え、自宅を出る前にフェネクスに持ち物確認されるといふ最後の朝の儀式を終え、車庫に向けて歩を進める。

シャッターを開けた先に真っ先に視界に入るのは、銀色の洗練されたフォルムの大型バイク。

この時代において、化石燃料は大変貴重なものとなっており、それは終焉災害が発生する以前よりの問題であった。

そこで開発された最新のエンジン。それは太陽光を取り込むことで内燃機関に熱を送り、その熱を放出させることなく循環させることで、疑似的な永久機関を実現させたもの。

とある鉱山から発掘された、太陽光を取り込むことで熱エネルギーを限りなく無限に近いレベルで生み出す、そんな奇跡のような鉱石が、それを可能とさせた。

かつて『聖地』と呼ばれた土地で発見されたそれは、とある特別な加工法によって太陽光を通すと内側に向けて無限に乱反射し続けて、最終的に真っ黒に変色する現象を生み出し熱エネルギーを発生し始めるようになるという、人類の革新とも呼べる結果を導き出した。

太陽光以外は透過してしまうことと、太陽光を通した後の色合いから『ナノコロナ』と名付けられたそれは、想像を絶する量が出てきたことから、世界中にその恩恵を与えることができた。

このエネルギー革新が世界がひとつになる切っ掛けになったとも言われており、十年ほど前に加工技術を解明し世界に広めた「ステイ

「シーカーズ」という男は、当然の如く一躍時の人となった。

表舞台に出るのを嫌うのか、メディアに素顔込みで報道されたのはただの一度だけで、度々成果が公表されても本人が出てくるようなことはなかったが、その功績の数々はこの凄惨たる未来を見通し、それを乗り越える為に先んじて作られていたかのようなものばかりであり、その知名度はかつて存在していた『信仰』という概念が復活しかねないほどにまで高まっている。

そんな彼の知名度に反比例して、彼自身が今どうしているかという情報は欠片も出てこない辺り、噂にある死亡説もあながち冗談では済まないだろう。なにせ彼を喪うことは、人類を繋ぎとめる楔が一本外れるのに等しいのだから。

そんなナノコロナも、完全無欠とは言い難い程度には欠点が残っていた。

意図的に循環を止めなければ常に稼働し続ける為、その分消耗は激しくなり、結果として定期的なメンテナンスが必要になるというものだが、この問題はフェネクスによって解決されている。

『再構成』——それはフェネクスが持つ特性であり、本人は権能と呼んでいる。

精霊は固有の特性をひとつ所有しており、それぞれの能力は魔法少女に適応される。

再生のように徐々に元に戻るのではなく、一度魔力に分解して同じものを創り上げている。

分かりやすく例えるならば、再構成したばかりのこのバイクは、中古として売り払い、その売値で新品の同一品を買いなおしたようなものである。

例えどれだけ劣化していようとも、それに見合う魔力リソースさえあれば、瞬時に元通りになる。

これは科学が発展していた現代においても再現不可能な現象であり、イマジナリを倒せる以外に持つ魔法少女の絶対的な利点である。

一見何でもありな能力にも聞こえるが、制限は多い。その理由は、使用者の性能限界に依存していることにある。

質量保存の法則を無理矢理に魔力で補っているため、魔力がなければ扱えない。

必然、魔力が多ければ多いほどそれに相応しい結果を出すことができるのであるが、逆も然り。

使用者であるアスカの魔力総量が低いせいで、戦闘を優位にする為の手段として利用できず、巨大だったり複雑な物質は相応に魔力を消耗するため、対象に出来るものには限界があるということ。

本来ならばこれほどのテクノロジを再構成するのは不可能に等しいのだが、彼の万能性は最新鋭のエネルギー機械工学にまで手が届くほどであり、構造や原理を把握した上で再構成する箇所を厳選しているのである。

そもそもこのバイク自体、既製品をそのまま利用しているわけではなく、凱虎が荒廃した道でも快適に運転できるように魔改造を施したものである。

外観こそバイクそのものだが、その実態は軍用車両も裸足で逃げ出すほどの耐久性と地形適応性を持つオーバーマシン。

各地を転々と探し回りパーツを再構成して自前のバイクに肉付けするという、継ぎ接ぎも良いところの構成であるにも関わらず、それを完璧に組み立ててしまうのが、凱虎という男なのである。

”凱虎、またあんな顔してる……”

フェネクスは、バイクの暖機運転中に静かに目をつぶる凱虎の顔を見つめる。

貼りついたような、しかしそれでいて堂に入った何も無い表情。

思考に没頭している訳でも、想い馳せる訳でも、心落ち着けている訳でもない。

時間を潰す過程で何をすることもなく、まるで石像になって動くこともない。

それはまるで、命令を受信していないロボットそのものである。

静音エンジンが微かに発する唸り声以外には音のない世界。

蕭索たる空気は日常と化し、殷賑を極めた世界は見る影もない。

それでも、ヒトは生きている。絶望ばかりの世界でも、必死に生き

足掻いている。

たとえばそれが惰性であろうとも、生きていることにこそ価値がある。

今が無為であろうとも、歩みを止めなければいつかは新しい価値を見つかけられると。そう信じたい。

それはきつと、この世界に生きる誰もが抱く祈り。凱虎にも同じ祈りがある、絶対に。

そうでなければ、凱虎が積極的に魔法少女として働こうとする理由がないから。

一年。凱虎との付き合いは長いようで刹那的で、短いと語るにはあまりにも濃密だった。

フェネクスの知る彼は、最初からこんな感じだった。

空虚で、無機質で、無感動で——とにかく人としての感性の悉くを削ぎ落した、歪な木彫り人形のような人格。

元々感受性の強いタイプではなかったところに、連続した家族の死によってこうなったのではと推測しているが、真実を確かめたいとは思えない。

そんな彼のスタンスは、必要最低限という言葉に集約される。

他人と接触するのも、会話をするのも、食事も睡眠も休憩も——生きる為に必要な分だけの仕事を終えれば、それ以外はずっと家族がいる仏壇の前に居る。

それは家族を寂しくさせないための優しさからくる配慮か、それとも無意識に孤独を埋めようとしているのか。

或いはその両方か。どちらにせよ、それが良い傾向とは思えない。「行くぞ」

合図とともにフェネクスはバイクのサイドバッグに入り込む。

フェネクスのような精霊は魔法少女にしか観測されないが、非実体生物というわけではないので、こうして移動の際には工夫を凝らす必要がある。

それは声も同様であるが、傍から見れば独り言を話しているようにしか見えない為、念話で会話する手間が掛かる。

留守番させることは可能だが、フェネクスなくして魔法少女にはなれない。道中でイマジナリ反応が観測された場合、それを止める手段がないというのは致命的である。

例え実家から遠く離れた場所であろうとも、災害の惨劇による皺寄せは、いつか確実に自分の身を蝕む。

なればこそ、戦いから逃げるといふ選択肢など最初から存在しない。

逆に言えば、バタフライエフェクト染みた迂遠な方法で被る被害を考慮する程度には、凱虎は生きたいと考えているとも考えられる。

こうして推測ばかり立つが、真実に至ったことなど極僅かでしかなく、それほどまでに凱虎は心を閉ざしている現実ばかり改めて突きつけられるばかり。

それがフェネクスにはもどかしくてたまらなかった。

『今日はどんな頼まれごととするのかな』

「知らん。正当な対価さえ貰えればそれでいい」

『あの学校、あんまり好きじゃないんだよね……。なんか空気がピリピリするっていうか』

「俺には関係ない」

『……心配する素振りぐらいさあ』

「したところで、お前がこれからもその痛みを苛み続ける現実は変わらないぞ」

サイドバッグを軽く閉じ、凱虎はバイクを発進させる。

昨夜は夜の闇に紛れて判然としなかった世界が広がる。

罅割れた壁や地面、人が離れて風化しつつある家屋の数々。

一見悲惨たる光景だが、この程度は序の口もいいところ。

魔法少女として活動している凱虎の存在もあって、終焉災害による直接被害は未だにこの周辺一帯では起こっておらず、その余波や自然劣化が被害のほとんどである。

終焉災害の発生率が異常に高い地域などもあり、まさに地獄そのものとしか形容できない光景であった。

そう——凱虎はそれを見たことがある。

終焉災害が発生した直後。まだ電波が今よりも安定し、中継などがネットワークを通じて見られた時期のこと。

素人が投稿していたのか綺麗な映像ではなかったが、それでも記憶に鮮明に残っている。

かつての『聖地』が名を変え、そこをを巡って争っていた国をひとつに纏め上げてできた新生国家。その名はパルデス。

神殿のような旧時代の景観がとても印象深い国で、機械化が著しい国家の中では群を抜いて異質なことからも記憶に強く残っている。

彼の国の建国こそ、世界平定の決定打と言っても過言ではなく、それ以降は国家同士の戦争や紛争はひとつとして起こることはなくなり、平和の象徴として沢山の記念碑が建てられたとされている。

そんなパルデスは、今では誰の目にも留まることはなくなってしまう。

終焉災害によってできた巨大竜巻がパルデスそのものを覆いつくし、そのままパルデスは消滅した。

台風の日となったパルデスの国は、台風が晴れた後に綺麗さっぱりとなくなっており、そこだけが何故か砂漠化を起こしていたという、あまりにも異質な光景は記憶に新しい。

すべてが無に帰した光景。あれが人類が到達する結末であるかのような、ゼロへの回帰。

あんなものと比べれば、文明が形として残っているだけでも上等なレベルである。

『そんなこと言って、そんな態度だと敵を作るだけだって何度も言ってるでしょ?』

「まともな奴は見れば分かる」

『そのまともな人がそこそこ貴重なんだから、それを大事にしなさいって話だってこと! 貴重な顧客になるかもしれないんだから』

「……配慮はしているつもりだ」

凱虎はバイクという今では貴重となった移動手段を利用した、配達員のような仕事をして生計を立てている。

仕事と言っているが、貰っているのは給金ではなく物資である。

自給自足が困難な環境で生活している以上、それを取り寄せる手段がなければいずれ破綻してしまう。

自力で見つけ出せればそれで問題ないが、それにも限度がある。だからこそ、物々交換のようなシステムを利用せざるを得なくなる。

物資を得るための代償行為として、相手の求めるものを探したり運んだりするのが彼の仕事である。

終焉災害によって経済が破壊されたように見えるが、実際はそうではない。

東京のような、都市の中心かつ重要人物が集まりやすい場所においては、あらゆる面において他の都道府県よりも土地が整備されており、核が落ちても地面一つ揺れず、放射能も通さないドーム型の巨大シールドを代表とした設備が集約されていることもあり、そこだけに關して言えば『終焉災害』以前と変わらぬ活気があると言われている。

極端な話、東京は今や新たな日本であり、外部を切り捨てたところで、東京に住む住人にとっては何の痛手にもならない程度には、あの都市は完成されている。

外国に頼らずとも、東京が生きていけばすべて事足りる。それが現代の東京が持つ『力』と言っても過言ではない。

そんな日本では唯一と言ってもいい、地上で最も安全かつ豊かな場所である東京を中心に、食糧や生活用品が量産され各地に配給され始めている。

しかし、都市の中心であればあるほどに『終焉災害』の被害が大きい傾向から、東京そのものは護れても外側はどうしようもなく、未だに復興の兆しも見えないほどに荒廃しているせいで、移動ルートを保つこと自体が困難な現状では、安定した供給は見込めない。

道中で終焉災害の被害を受けた例も決して少なくはなく、まずは地盤を固めるという意味でも、各地に東京の巨大シールドの簡易版を設置してそこを中継地点とする計画も徐々に進行しつつある。

『雨宿り』そのものを増設する可能性も考えられたが、周囲の地盤崩

壊や居住者の負担になることを筆頭に、現実的ではないと推測している。

基本的に地下設備の存在する場所には誰かが住んでいるのが常であるため、それを脅かそうとする存在は、例えば長い目で見ればプラスに働く結果であろうとも迫害される。それは『雨宿り』の件でも分かる問題だ。

明日を生きられる保証もないこの時代。少しでも安穩と過ごしたい時間に土足で踏み込まれるというのは、考え得る以上に精神に負担をきたす。

凱虎自身がその典型的パターンであるが故に、こうして独りで生きられるようなやり方で食い繋いでいるのは分かるが、彼の場合は度が過ぎているからこそ、フェネクスが世話を焼いて人付き合いを改善させようと頑張っているのだ。

「あれ、あそこにいるのって……」

フェネクスが半開きのサイドバッグから覗いた光景の先では、昨日校舎の窓から見た女性——幸節結花こうせつゆいが笑顔で校門前に立っていた。

バイクを彼女の前で止めると、おもむろにあちらの方から近付いてくる。

「おはようございます、凱虎さん」

「おはようございます」

「いつも通りの時間に来てくださるおかげで、お出迎えがちゃんとできて良かったです」

昨日一人の時に見せていた疲れた顔などは一切見せることなく、心の底から歓迎を示す結花。

そんな彼女の反応に対し、凱虎は手探るように会話を続ける。

「それよりも、今日の配達の件について」

「あ、そうでしたね。では、応接室にご案内します。凱虎さんの為に、良いお茶を用意してたんですよ」

「いや、別にそこまでしてもらうつもりは——」

「凱虎さんのおかげで助かっている人達は大勢いますから、むしろこれぐらいしか恩を返せないことに申し訳ないと思ってるんですよ？」

申し訳なさそうに俯きがちに見上げる結花。

凱虎はその反応に対し二の句を告げずにいられるうちに、いつの間にか手を取られそのまま引つ張られるように歩かされる。

「一名様、ご案内で〜す！」

結花にされるがまま案内をされる凱虎が唯一できた抵抗は、小さな溜息だけだった。

運命の収束

「どうぞ。お口に合えばよろしいのですが」

眼前のテーブル上に、紅茶の注がれたカップが置かれる。

湯気から香り立つ甘い匂いが、舌先で味わわずとも芳醇であることを強く語っている。

「……天然物か」

「はい。折角なので奮発しました」

配給食糧の種類は、天然物と人工物の二種類で大別されている。

天然物は言うなれば市販されている形そのまま提供されるもので、人工物はあくまでも食料としての価値のみに重点を置いたもの。前者は経済が生きている土地において金品等で取引される価値のあるもので、後者は味や栄養価を再現しただけのレトルトやエネルギー補給食を指す。

飲料は無機質なパッケージだとしても中身がそのままだからマシンだが、固形物となると無機質感が際立ってくる。

味も匂いも肉であるが、実際は植物の遺伝子組み換えによって造られた合成肉。それを初めとして、同様の偽物が今の我々の食事の基本となっている。

見た目に彩りのない、栄養を補給するためだけの食事。食欲を減退させるだけの材料が整い過ぎているそれは、皮肉にも我々が生きる上で必須の栄養素をふんだんに含んでおり、これなくしては先は長くないと言いつけるが故に、どんなに嫌であろうとも食べる必要がある。政府がこのようなディスプレイアめいた食事を提供しているのは、日本全体の崩壊具合が大きく関わっている。

日本国内全域に配布するものとなれば、生産性やコストを重視してそれ以外の部分を切り捨てなければ、とてもじゃないが間に合わない。

現在、生産工場は東京にしか存在しないらしく、生産性が十全であろうとも『終焉災害』によって崩壊した外側で、まともに移動できるような道は限られている。

破壊の根幹たる『終焉災害』がいつ発生するかどうかも分からず、物資が目的地に到達するまで数撃ちしてを繰り返してようやくといった状況である。

衛星から観測出来る地上のデータを常時フィードバックすることで運搬車両の自動操縦を可能にしていなければ

、三分の一ほどは衰弱死していたことだろう。

しかしそんな現状を良しとしてはおらず、対策の一環として配給物の中には人工物以外にも少量ながら天然物も一緒に支給されている。

コストを度外視して提供されるそれは、人間の心の安定のために必要不可欠な代物。

特に精神的に未熟である子供が理不尽な環境下で生き延びるには、この程度苦肉の策にもならない。

だからこそ、そんな貴重品を部外者に提供する心理が凱虎かいとにとっては何よりも度し難いものであった。

「大丈夫ですよ凱虎かいとさん。これは皆さんときちんと話し合った上で出したものですから」

屈託のない笑顔と共に思考を先読んだ答えが返ってくる。

こちらを不安にさせないための方便などではなく、彼女が言うからには先の発言は紛れもなく真実なのだろう。

彼女との付き合いはこの仕事をするようになってからであるが、その常軌を逸したお人好し加減は出会って間もなく思い知らされることとなった。

運び屋なんてものを何の後ろ盾もなしに敢行かんこうしようとするにあたって、前提としてまずは信用を勝ち取ることが肝要となる。

自分にとって大切なものを一時とはいえ他人に預けるといいう行為は、こんな時代だからこそ平時以上に重く捉えなければならぬ選択である。

セキュリティなんてものは存在しない中で、仮に窃盗が行われたとしてその対処に他人を頼るのは悪手以外の何物でもない。

誰もが自分のことで手一杯な状況で、他人の為に行動できる人間など限られている。仮に窃盗犯を頼った誰かに取り返してもらったと

して、それを取り返した人間が素直に返す保証などどこにもない。

同様に、運び屋に荷物を渡してそのまま逃走を計られてしまえば、その時点で詰みに等しい。二度と渡したものが戻ってくることはないだろう。

誰が好き好んでそのようなリスクを孕んだ行動を取れるだろうか。否、いる訳がない。

故にまずは補給物資の橋渡しを無償で行うことで、信用を勝ち取る方法を臨んだ。

そして、その初めての商売相手が彼女だったわけだが――

「……相変わらずな人だな」

「はい？」

嘆息と共に無意識に呟いたそれは、結花に届くことなく掻き消える。

まるで子供のようにモノを知らなさそうな惚けた表情を見ていると、無性に心を乱される。

形容しがたい感情が湧き立つのはハッキリ言って不愉快だが、それでも距離を置こうとは思えない。

やはりそれは、彼女が一番のお得意様であるからという結論を出してはいるが、腑に落ちない部分があるのもまた事実。

とはいえ、商売に支障が出るような状態にまでは達していないため、現状は保留という事になっている。

精神的に摩耗するとはいえ、貴重な収入源であることに変わりはない。望んで孤独であろうとしている分際で、そこまで選り好みできるなんて思っていない。

この感情が発露したのは、彼女との商談を始めてすぐのことだった。

凱虎はあらゆる結果を想定内の範囲に収めるべく、常に考えて行動しようと努めている。掌の中に収められる範囲の事象ならば、対処も楽だし何よりも無駄がない。

今回の商談に関しても、善意による無償奉仕から得られる歪な信頼は、後々にビジネスとして話を持っていく上で不都合が生じると考

え、最初から打算ありきであることを明け透けにして話を進めていたのだが、ここで予想外が生じる。

『運び屋さんなんですか？じゃあ、早速なんですけどこれを運んでもらってもよろしいでしょうか？』

純粋な喜びに満ち溢れた表情と共に、そんな言葉と共に頼み込んできた結花の姿は、今でも鮮明に思い出せる。

一年という年月を経てなお微塵も変わらぬ醇乎じゅんこたる在り方は、人間と定義するよりも天使とした方がまだ納得がいく。

天使という表現を使ったのは、世間一般のイメージに沿った「人間にとつて都合の良い善なる存在」という要素が噛み合ったからであつて、本質としては神話に出てくる天使の「人間とは隔絶した倫理や価値観を持つ異なる存在」というイメージが彼の中で最も着目する要素であり、前半のそれはオマケでしかない。

極端な話、獣だろうが宇宙人だろうがイメージに合致する存在であればどれを例えにしても問題なかったのだが、想像の中とはいえ彼女に対してそういうイメージは一切符合しなかったため、消去法でそうなっただけのこと。

凱虎にとつて、彼女のような人間はまさしく天敵と言つても良い存在である。本来ならば関わり合いたくはないのだが、彼女の善意に付け込まなければまともに立ち行かない程度には、運び屋は閑古鳥が鳴いているのが実情である。

自分でも何故こんなことをしているのかを自問したことは幾度とあつたが、その度に答えは出ず。

そもそも、効率だけを求めるならば孤独で在ろうとする行為そのものが無駄そのものである時点で、解答を求めること自体が間違ひのようなものだ。

だがそれでも、と先の見えない暗闇の中を進もうとするのは、人間の持つ愚かさ故か。

その愚かさの果てが、科学の発展に伴う人類の幸福だというのならば、それもまたひとつの答えなのだろう。

「馳走になつた」

「はい、お粗末様です」

紅茶の味に関心はなかったが、素人の味覚でも分かる程度には繊細で味わい深く、何より匂いが素晴らしい。

飲み干し終えた後も鼻腔をくすぐる甘い香りは、いつまでも嗅いでいたいと思わせる魔性を秘めている。

数年前までは当たり前に身近に存在していたものなのに、今では三ツ星レストランよりも遠いものとなってしまった。

流石にこれの貴重性を理解していないほど蒙昧もうまいではないと信じたいが、如何せん普段の言動があまりにも浅慮過ぎるせいで信じ切れない。

「えっと……それで、なんですけどね。お願いがあるんです」

結花にしては珍しく歯切れの悪い言葉に、思わず瞠目とんもくする。

良くも悪くもマイペースを貫く彼女が遠慮がちになるなんて、余程の事情だろうか。

そうであるならば、先程の紅茶が出されたことにもある種の納得が得られる。

自然に振舞うことで前料金としての意図を隠し、後々の交渉の材料とする。彼女の真意が何であれ、凱虎の中で珍しく自分の価値観と符合したことで溜飲が下がる。

「実は……娘の誕生日がもうすぐあるのですが、誕生日プレゼントになるようなものを探しているんです」

「——娘が、いるのか」

「はい。今年で14になります」

結花の発言は、凱虎にとって青天の霹靂と呼ぶに相応しい驚きを生んだ。

表情にこそ出ていないが、彼がここまで驚愕したのはここ数年——それこそ、フェネクスとの出会いや魔法少女に変化した時でさえ、今ほど驚愕することはなかった。

彼の感情を揺さぶる何かが、彼女の言葉の中にはあった。だが、それをまるで理解できずにいる。

本来ならば容易く察せられる感情の答えは、彼の常軌を逸した対人

経験の無さによって迷宮入りを果たしてしまう。

他者との接触を好まない凱虎にとって、会話は当然として、他人に知覚されることどころか、自然と耳に入るような外部の情報さえも雑音としか認識していなかった。

見られたくない、話したくない、聞きたくない——誰がどう見ても子供の我儘でしかないそれを貫いて、それでも優秀であるがゆえに比較的まっとうに生きられるせいで、ここまで拗らせてしまった。

周期的とはいえ、それなりに接点のある相手の家族構成をぼんやりとさえ認識していないのは、如何に彼が視野狭窄であるかを証明している。

凱虎の万能の才は天性のものであり、彼の常識はそれを前提とした歪なものへと仕上がっている。

できないことはほとんどない。あつたとしても、少し学ぶ意識を持てば解決できてしまう。それが普通であり、結果として他人を頼るという選択肢が消えてしまう。

凡人が手を取り合つて成し遂げるような成果も、彼にとっては一人で事足りる事象でしかない。

それでも他人を頼った方が楽な状況は幾らでもあつた。だが、それを選択肢として受け入れられるような視野の広さを獲得した時点で、彼の今の人格は完成されてしまつていた。

それでも今こうして他人と接しようという姿勢を見せているのは、何もフェネクスの後押しだけが理由ではない。

皮肉な話ではあるが、終焉^{エンドマーク}災害に端を発した身内の不幸が、凱虎を真人間への一步を踏み出す切っ掛けになつていたのである。

正確には、妹の飛鳥の今際の際に遺した言葉が、である。

死者の祈り、唯一と言つて良い心を許せる相手であつた家族の言葉の二乗で、ようやく錆が落ち始めた段階だが、それでもその亀の一步が今の彼を形成していることは疑いようもない。

何せ、彼はその言葉を聞かされる直前まで、妹を弔つた後は自分もその後を追おうとさえ考えていたのだから。

「それですね、何か贈り物をしてあげたいとは思うのですが、何分こ

のような時代ですから……」

今を生きることさえもままならない現代において、娯楽を堪能できる人間はごく限られている。

都市が機能している場所でも、そのような娯楽商品を扱っているようなところは少ない。需要はあるが、それを利益として還元できる環境が整っていないのだ。

そうになると、娯楽を得るには自力でどうにかするしかない。

過去の遺物の残骸を漁ったり、自作をするという二択が、今の我々にできる精一杯の譲歩。

贅沢を知る者は、それを手放すことは出来ない。強制的に引き離されたとしても、それを受け入れられる人間が果たしてどれだけいることか。

「あの子のことだから、プレゼントがなくなるとも文句のひとつさえ言わないでしょう。ですが、私はそれがどうしても許せなくて……」

微かに震える声。しかし目線はしっかりと此方を見つめ続けている。

彼女が娘をどれだけ思っているかは、この態度を見れば十分理解できる。

そんな彼女の苦悩は、今や有り触れたものでしかない。

貧困に喘ぎ、病に苦しみ、足りぬ足りぬと言葉は波紋となり世界を覆う。

駄目押しの終焉^{エンドマーク}災害の突発性と規模も相まって、盗掘紛いの行為もハイリスクローリターンでしかない。

終焉^{エンドマーク}災害を畏れ、不定期に届く物資で食い繋ぐことでのみ、生を実感する日常。それに彩りを添えたいと思うことは、何ら特別な願望ではない。

「理解した。それで、欲しいものはなんだ」

「無理を承知で頼む手前申し訳ないのですが……これといったものは決まっていないのです。あれもこれもと思い付きはするのですが、どれも現状では高級なものばかりで」

「それを言えばあらゆる事柄に当て嵌まると思うが……まあいい。な

らば此方で見繕う方向で構わないか」

「はい、お願いいたします」

結花の深々とした一礼を見送り、立ち上がる。

「もう、行かれるのですか？」

「時間は有限だ。安全を考慮するなら陽が落ちる前に事は済ませたい」

明確な目的地と呼べる場所もない、ひたすらに虱潰しになるであろう道程を思えば、そもそも今日明日で解決する問題かどうかも怪しい。物資の調達目的で遠征した結果赤字になってしまつては、本末転倒もいいところ。

ビジネス上の関係で、数少ない固定客相手であろうと、その前提を崩してしまえばたちまちすべてが瓦解する。

国家の血液とも言える金銭が機能しない状況で、対等な関係を築くというのは難しい。

ルールを尊重するという行為が、他者の善性にのみ依存する無法地帯で、過大な善意など逆に食われるための撒餌でしかない。

確かに彼女は、他の人間と比べて信用に値する人柄である。だが、それは無償の援助に繋がるようなものではない。

「そうですか……」

何故か残念そうに呟くその姿も見慣れたもので、そこまでして此方を引き留めたい意図があるのだろうか。

或いは、単純な善意で休憩を促しているだけだとすれば、それこそ余計な世話である。そんなもの、どちらも得をしない。

……とはいえ、善意自体を否定したい訳はない。ましてや、彼女は数少ない固定客。下手に不興を買うようなことは避けたい。

今後も贖身してくれることを期待して、適当な土産でもついでに確保する方向に皮算用を立てる。

あくまでついでであり、優先事項を履き違えることはない。

「私が言えた立場ではないですが、お気をつけて」

無論、言われるまでもない。

以前ならばいざ知らず、今は自殺願望を抱えてなどいない。

死地に向かうのはその価値があるからで、そうでなければ誰がこのような愚を犯すものか。

深々と頭を下げる結花に見送られ、校舎を出る。

それと共に、無邪気な笑い声が木霊し、無意識に顔をそちらへと向ける。

予想通り、校庭を走り回る子供達の姿が目に入る。

予想外だったのは、子供達の誰もが満面の笑みで遊びまわっていたことだろうか。

この時代、誰もが精力的に人生を謳歌出来る訳ではない。

文明の崩壊、辛うじて残った文明で生きることが許されなかった事実、過去の栄光を知るが故の絶望——積極思考を持てず、無気力に今を生きるだけの人間は今や世界中のどこにでも存在し得る。

万人に向けた法整備が整っておらず、定職に付けずその日暮らしさえままならない人間が珍しくもなかった時代と今では、圧倒的に後者の方が不幸の多数派を背負わされている。

人災ではなく天災ともなれば、人類は待ち構える以外に対抗策はない。

そして抗えきれなかった結果、我々は大きく時代を遡る羽目になってしまった。

いつそ記憶も同様に遡ってほしかったと誰もが願ったに違いない。

それは、人生経験に大きく差がある子供であろうと例外ではない。

運び屋をやっているれば、興味がなかりとも自然と周辺の状況や情報が入ってくる。

色々な人間と関わっていく内に、人類がどれだけ疲弊しているかが見えてくる。

誰しも大なり小なり不満は当然抱えており、現状こそが理想であると答える人間は一度とて見たことがない。

声に出していないだけで、不満は魔女の鍋が如く沸々と煮え滾っている。

心根の本音を吐き出してしまえば、不満が伝播しそれが狂気と呼んでしまうと理解しているからこそ、妥協した言葉で覆い隠し、自らを

騙す。

そうしなければ、心に柵を持たない人間は悉く破滅へと至る。

その最たる存在こそ、子供である。

子供とは無垢である。それは無知であるが故の純粹さであり、故に世界を視る尺度も短い。

だからこそ、こんな時代でも明るく生きることが出来る。

良い意味での蒙昧さが、未来に希望があることを信じて疑わない。しかし、それにも限度というものがある。

子供が子供で居続けられるには、あまりにも過酷な環境。身の丈に合わない成長を強いられるのは、必然である。

それ故に、目に映るすべての子供が無垢な笑顔で遊びまわっている光景が信じられなかった。

食料が潤沢にあるわけでもなく、衛生面でも気を遣っているとはいえそれでも優れているとは言いがたい。

今まで見てきた環境と大差ない、有り触れた不幸を抱えた場所であると思っていたからこそ、この場所が作る他との明確な差が信じられずにいる。

ここ以上に設備が整っているシエルターの中でさえも、このような光景は見たことがない。

何が子供達をああも眩しく彩っているのか、興味を抱くのは必然だった。

自分達が心折れようとも、子供達の未来に希望を託すため、大人達は亀の一步を絶えず歩み続けていく。

現実には抗おうとして、それでも那由他の彼方さえ見えない希望に、次第に子供達にまで絶望が侵食していく。

それでも、決して歩みを止めずに邁進する姿は、泥臭いにも関わらず、とても眩しく映った。

そして自分は、そんな光景を見て胸の裡が淀んだ感情に支配されていくことを繰り返してきた。

フェネクス曰く、それは護るべき存在を失ってしまったが故の嫉妬だと語った。

本来は良くない感情だけど、それは自分に他者を思いやる優しさがあるからこそだとも付け加えて。

奴の言葉は、不思議と腑に落ちた。

数少ない共感できる事柄であるからこそ、持つ者と持たざる者の差で心が揺れ動く。

妹が生きていれば、自分の生き方も大きく違っていただろう。

妹を護るために、このような無茶を敢行せず、細々とした生き方を選択していたに違いない。

しかし、それはただの夢想でしかなく、これからも孤独に漫然と生きていくだけの空虚な未来しかない。

そう、思っていた。

ふと、遊び回る子供達とは対照的に、上半身が覆われるほどの段ボールを運ぶ子供が離れた位置でよたよたと歩く姿が目に入る。

おもむろにそれを降ろすと、隠れていた上半身が露わとなる。

「——な、」

これが、転換期。

血縁である自分でさえも疑いようもないほどに、妹である飛鳥と瓜二つな少女との邂逅が、私自身を——否、世界そのものを変換させるものになろうとは、想像だにしていなかった。

偶然と必然

理解と納得は別物であるとはよく言ったもので、目の前の少女が妹ではないことなど現実的な観点からして当然であるというのに、それでも縋りつくかのように歩みを少女へと進めている自分がいる。

一縷にも満たない希望、裏切られることが確定した未来。それでも歩みは止まらない。

そうして、遂に彼我の距離は目前にまで至る。

少女は荷物を降ろしたばかりで、疲労から頬を伝う汗をハンカチで行儀よく拭う。そうしてようやくこちらに気が付いたようで、おもむろに顔を此方へと向ける。

ああ——やはり、違う。

瓜二つであることは依然変わらないが、妹は自分と同じく黒髪で長髪は邪魔だと嫌っていたのに対し、少女は腰までであろうかという金髪。

薄氷を想起させた瞳も、紅蓮の如き赤色で染まっておりまるで対極。

病人とは思えないほどに血色の良い顔立ちは、最早自分でさえ記憶にないほどに幼い頃の情景であり、故にそれが少女と妹が別人であるという決定打となった。

「こんにちは、お兄さんー!」

「……ああ、こんにちは」

呆気に取られていると、少女の方から元気な挨拶をされる。

少女にとつては、見知らぬ成人男性が顔を見るが否や呆けるような変人に映っただろうに、声色からは一切の忌避感はない。

今の自分は少女に無言で近付いたかと思えば、名乗りもせずには棒立ちしていた不審者。幸いにも客観的に見れば明らかに通報されていたであろう光景は、誰にも見られずに済んだらしい。

如何にコミュニケーションの輪から外れて生活しているとはいえ、こんなことで爪弾きにされるなんて冗談ではない。

「お兄さん、私に何かようですか?」

『お兄ちゃん、どうしたの?』

心臓が跳ねる。

笑顔と共に兄と呼ばれた瞬間、妹の姿が一瞬重なった。殆ど差異のない錯覚は、まるで実像を得たかのように鮮明で——そのような幻想を視た己に、明確な殺意を覚えた。

「——私を兄と呼ぶな」

絞り出すような言葉で、そう辛うじて返す。

分かっている。彼女の発した兄と言う言葉に、そのような意図がないことぐらい。

だが、理解と納得は別。その顔が発する兄と言う言葉は、心に宿す穏やかな小波を嵐を伴う荒波へと変容させる。

これ以上感情を乗せてしまえば、罪のない少女へと呪詛を吐いてしまいそうで、それだけは駄目だと僅かな理性で押し留める。

それでも、一切の平静が保っていた訳ではないのは確かで、謂れない感情が僅かでも自身にぶつけられようものならば、多感な子供は敏感にそれを受け止めてしまう。それが普通であり、自然な反応。

「じゃあ、お名前教えてくれませんか?」

しかし、少女はまるで気にした素振りを見せない。

少女然としない、型に嵌らない不気味さを感じたものの、そもそも子供の何たるかを語れるほど人生経験豊富ではない自分に少女への所感を語る資格はない。

それよりも、己の不始末を少女に気遣わせた事実を反省すべきであろう。

「……皇凱虎だ」

「カイトさん、ですね。私は幸節蘭こうせつらんと言います」

「幸節……ということとは、君は幸節結花の娘か?」

「えっと、はい。そうですけど……?」

……何だこの偶然は。

娘の存在を聞かされた途端に出くわしたかと思えば、その姿は亡き妹と瓜二つ。

三流劇のような流れに戸惑いを隠せずにいる間にも、蘭は言葉を続

けていく。

「そういえばお母さんが良く話す人の名前も、カイトさんとおんなじ名前なんですけど、もしかしくなくても本人ですよね？」

「そう言われても答えようがない。確かに彼女とは幾度か接点はあったが、世間話に出るほどの関係を築いた覚えはない」

「いえ、絶対にそうです！お母さんが言ってた特徴と一致していますから」

「……そうか」

皇凱虎なんて名前がこの世に二人といるとは考えにくい。そういう意味では蘭の推理は的を射ている。

だが、結花が自分のことをよく話す理由がまるで思いつかない。そのような話題にされるぐらいに接点も交流もした記憶はない。

「あ、信じてませんね？」

「生憎と心当たりがない。いや、あるにはあるが必然性が感じられない」

個人で物資を運ぶなんて奇特な真似をしている人間なんて自分ぐらいのものだろう。

しかし、希少性と話題性は必ずしも一致する訳ではない。

とはいえ、娯楽に乏しい現代においてはこの程度でさえも話のタネぐらいにはなるのだろうか、蘭の様子では一度や二度の話ではない。

結花の琴線に触れる何かがあったのかもしれないが、それを理解するには至れない。

そもそも、自分は誰かに対して「共感」を覚えたことはない。

他人は当然として、血縁であろうとも自分でないのであれば究極的には他人でしかない。

共感という言葉の意味を理解しているからこそ、軽々しく共感したつもりになっている人間を見るたびに、無責任であると軽蔑してきた。

共感に限った話ではなく、他人と同調するような言葉を容易く吐く人間は、得てして同調した側の立場が不利になれば躊躇いなく掌を返す。そうして何食わぬ顔で、自分は関係ないと有利な方へと迎合す

る。

そんな意志薄弱で無価値な人間が嫌いで、だからこそ理解せざるを得ない家族以外の相手とは接点を断ってきた。

期待するだけ無駄、数合わせ以外の価値しかない、そんな十把一絡げの為に時間を割くぐらいならば、理解できる家族の為に時間を割くのは何ら不自然なことではない。

投資と賭博は似て非なるもの。自分にとって他人を利用することは後者を指す。

その思想は今後も変わらない、はずなのだ。

では——何故、いつまでも立ち尽くしているのか。

一時の衝動に身を任せ、それが無為に終わったのだから、潔く立ち去るべきなのに。足が楔になったかのように動こうとしない。

「お母さん、言っていました。皇さんのおかげで凄く助かっているって。いえ、お母さんに限った話ではなくて、みんながです」

ぽつりぽつりと、蘭は語り出す。

その声色は、ただただ惰性に今を過ごしている子供には出せない、明確に現状を理解しているからこそその悲壮感と苦悩、そして私に対しての感謝を宿していた。

「この一帯はどうしてか災害の被害が少ないおかげで、こうして地上で住むことも出来ていますが、離れた場所では被害が甚大で、陸の孤島みたいになっているのはご存じですよね？」

「……ああ」

「地下と違って安全に地続きになっている場所もないし、シェルターみたいに設備が整っていないから自給自足も難しい。物資の調達を外部からの供給に頼り切っている状況で、カイトさんの存在は本当に有難かったんです。神様の遣いなんて言葉も大げさじゃないぐらい、カイトさんがここに来てくれるようになってから生活が楽になったんです」

静かに、しかし必死に意思を伝えようとゆっくりと言葉を紡いでいく様は、知に疎い子供であることを忘れさせるほどに聡明である。

結花の教育の賜物か、蘭の気質によるものか。どちらにせよ、自ら

を聡明だと勘違いした小賢しい大人と比べて、彼女の方が随分と話しやすい。

「二人分の保存食を分け合うことで配給日までの飢えを凌ぐ必要もなくなつて、今ではあんな風に子供達が元気に外で遊び回れるぐらいには余裕ができたんですよ？ 以前は、動けばお腹が空くからと部屋の隅で大人しくしている子供ばかりで……」

言われてみれば、確かにここを訪れた当初に比べて活気づいている。

子供達の喧騒こそがその最たる要素ではあるが、たったそれだけでも以前に比べてマシと言える。

初めてここを訪れた時は誰もが半死半生と言った有様で、どこを見渡しても目も当てられない光景ばかりだった。

それこそ、仮にここをビジネスの場を選んだとして、見返りなどまるで期待できない程度には。

「その割に、君は遊びの輪に入らず仕事をしているようだが」

「それは……」

「言いたくなければそれでいい。ただ、君の母親を思えば、君がそうしていることを良くは思わないだろう」

先程とは打って変わって、気まずそうに言い淀む蘭。

しかし一呼吸置いた後、決意した様子で此方の目を見て、言葉を絞り出した。

「——お母さん、毎日大変そうにみんなの為に走り回って、だけど辛いつて言ってくれなくて、我慢してばかりで……」

「だから自分の出来る範囲で手伝っていた、と」

無言で頷く。

打算の欠片もない、純粹な善意がひしひしと伝わってくる。

しかし、善意だからと言って何をしてもし上手く事が運ぶわけではない。

意識的でも無意識でも、自分の行いが胸を張って正しいと言えないという事を理解しているからこそ、助けたいという純粹な善行に後ろめたさを覚えている。

「それで、その荷物はどこへ持っていくつもりだったんだ？」

「……え？えっと、確かあつちの——」

唐突な質問に対し、要領を得ない態度を取り始める蘭。

「よもや指示された訳でもなく、自己判断で動いていたのか？」

「……はい」

半ば確信に似た問い掛けに、蘭は小さく肩を強張らせる。

まるで点数が低い答案用紙が親に見つかった時のような態度は、此方の問い掛けが正しかったことを何よりも証明している。

「ハッキリと言わせてもらうが、君の行動は無駄の極みだ。母親の手伝いをしたいと息巻いている癖に、その行動は推測による場当たり的なもの。母親に止められることが分かっているからこそ、そのような迂遠な手段に出たことは想像に難くない。しかし、そのような半端なスタンスでは非効率的どころか、むしろ邪魔をする結果にさえなる。すべてが潤沢で余裕のある環境ならば社会勉強の一環……先行投資と割り切ることも出来るが、第三者目線で現状を顧みたとして、恣意的で褒められた行動とは言えないな。最悪、君の身勝手な判断が母親だけに限らず君自身をコミュニケーションから爪弾きされることさえ懸念される。それは君にとつて本意ではないだろう。ならば——」

衝動の限りのまま、考えられるデメリットを羅列していく内に、蘭の変化に気付く。

自分を見上げていた表情は俯きがちになり、その模様は何えなくなっている。

しかし、前後の状況を鑑みれば彼女の反応はおおよそ想像がつく。

子供相手に強く言い過ぎだ。いくら前提の知識があつたとして、初対面である相手からここまでき下ろされる謂れはない。

思えば、見知らぬ他人と距離を取ってきた理由のひとつには、この言動が受け入れられなかったことが大きな要因としてあつた。

毒を除く薬としての助言も、他人からすれば大きなお世話。

正論という蜘蛛の糸を垂らしたところで、それを跳ね除け地獄に進んで残ろうとする愚鈍な人間と関わるのは無駄。実利を供わない徒労をにいつしか切り捨てるようになった。

善意が必ずしも良い結果を運ぶとは限らない。だが、目に見えた欠点を見ぬ振りをして、他人に指摘されて顧みるタイミングがあつたとしてもそれも無視して、感情論で突き進んだ結果泥沼に沈む。その果てに行き着いた愚鈍な人間の成れの果てを、腐るほど見てきた。

だが、それはあくまで同年代に向けた対応であり、これを妹と同じぐらいの子供に対して当て嵌めて良い道理はない。

知識も情緒も倫理観も未発達な子供相手に大人の理屈を叩き付けたところで、それこそ感情論が優先されることが簡単に想像できるだろうに。

それに気付けなかったのは、やはり無意識に妹と蘭を重ねていたからに他ならない。

妹の知識量は趣味の読書が高じて、同年齢の子供と比較にもならない程に高水準の域に達していた。

それこそ、知識量という観点のみにおいては、一般的な大人にも引けを取らないと鼻負無しで言い切れる程に。

無知で居ることが我慢ならないタイプであつた彼女は、自分や家族との会話や読書の中から出てきた見知らぬ知識に対して、それを貪欲に我が物としていった。

優秀な科学者の血を受け継いでいることもあつてか、地頭の良さは保証されている。

加えて、一般人では調べようと思わなければ知り得ない知識も、研究資料として保管されているものから気軽に閲覧ができる環境であつた為、それを読解する為に前提となる知識を探し、積み重なっていく。

その知識に向けた貪欲さの根幹にあつたものは、自らを蝕む肺炎のような症状の治療手段を見つけないという決意。

遙かに発達した医療を以てしても解明できなかったソレを、ならば自分で解き明かしてやろうという傲慢。だが、必然の流れとも言えた。

そんな決意の蕾は、無慈悲な現実に容易く手折られてしまった。残されたのは、夢も展望もない出涸らしでしかない自分だけ。

神などとうに廃れた概念ではあるが、もしこの運命を玩弄する存在がソレだと言うのなら、その顔面に一発喰らわせなければ気が済まない。

「——あのっ」

時間にして、十秒にも満たない時間。しかし、その何倍にも体感を経て蘭の絞り出すような声が発せられる。

しかし、泣き腫らしていたと予想していた表情は、予想外にも困惑一色で満たされていた。

故に、彼女が何を思っているのか予想がつかず、懸命に可能性を脳内で羅列していく。

些細なことであろうとも、不確定要素を取り除かずにはいられない。

「えっと、私の為に怒ってくれているのは分かるんですけど……」

「けど？」

次の言葉を、僅かに身構えて待つ。

「……よくわからない単語とかばかりで、何が言いたいのかが分かりません」

「……すまん」

辛うじて出てきた言葉は、先程まで子供相手に持って回った言い回しをしてきた男のものとは思えないぐらい、陳腐で無味乾燥な謝罪だった。

「そうだな、つまり——素直に手伝いたいと伝えることから始めるんだ」

「で、でもそれだとお母さんが……」

「ああ、断るだろうな。君が傷つかないような言い回しで、それとなく遠ざけようとするだろう。だが、そこで諦めてこっさり手伝ったところで今みたいな状況になるどころか、彼女のことだから君に負担を掛けていることを負い目に感じるだろうな」

短い付き合いではあるが、まさかあのお人好しの塊のような女が、他の子供達が遊んでいる手前自分の子供にだけ労働を強いるなどは考えられない。

こんな時代では最早天然記念物レベルの奉仕精神の持ち主である彼女のことだ。自分が至らないが故に娘に苦勞を掛けてしまっている、という思考に帰結するのは必然に等しい。

その娘は娘で、母親の負担を見て見ぬ振りが出来ず、子供なりの知恵を絞って手伝いをしている。

善意の堂々巡りで、互いの身体に爪を立てる関係。傍から見ればなんと滑稽なことか。

赤の他人ならば一瞥する程度の価値しかない劇だが、この親子が舞台で踊っているとなれば気にせずにはいられない。

だからこそ、普段の自分では考えられないぐらいに言葉を尽くす。

「だが、そうしなければいつかは取り返しがつかなくなる。人間関係はたかが、されど、と言える程度の小さな出来事が傷を広げていくものだ。無理を通してでも母親を手伝いたいぐらいだ。無自覚なまま、気付けば傷付けていたなんてことは嫌だろう？」

無言で何度も頷く蘭。

正直、誇張もいいところだが、これぐらい強く言えば馬鹿な真似はしないだろう。

通常の間人間関係ならば、他人を傷つけるよりも自分が傷つくことを恐れる。リスクとリターンさえ噛み合い、かつ自分に痛みが伴わないならば、むしろ傷つけることも辞さないと考えるのが人間のサガだ。

しかし、この親子に限って言えば相手を傷つけた罪悪感で苦しみ、その姿を相手が見てさらに苦しむという負のスパイラルが容易に想像つく程度には善人氣質だ。腐った人間を幾度と見てきたからこそ、それは絶対の根拠となる。

「なら、今すぐにも伝えに行くんだ。荷物の見張りぐらいならやってやる」

「いえ、そこまでさせられません。これからお仕事なんですよね？これ以上引き留めてしまうわけにはいきません」

言い出した手前、確かに過保護が過ぎたと思ひ直す。

この時代、自立出来ないようでは未来はない。親元に居るとはいえ、少しでも一人で何事も為せるようになるに越したことはない。

「そうか。じゃあ、しつかりやれ」

「はいっ」

そういうが否や、荷物を抱えて校舎内へと走り出す。

時折荷物の重さに引かれてふらつきつつも、しつかりとした足取りで進むその姿を見送り、バイクへと再び向かう。

『——あつ、ようやく届いた！いつにも増して遅かったけど、何かあったの？』

突如、フェネクスの声が脳内に響く。魔力による通信の範囲内に入った影響だ。

「何も無い」

『……ならいいんだけど。じゃあ仕事の概要を教えて。計画立てなきゃでしょ？』

「移動しながら説明する。今は時間が惜しい」

『うん、早く行こう行こう！』

フェネクスに急かされる形で、バイクに跨り移動を開始する。

舗装されていない起伏のある道とはいえ、車のような移動手段が廃れていることもあり、衝突の心配をすることなく臨機応変に障害を避けていく。

『エリアサーチの必要はある？』

「まずは近場を当たる。無駄に速度を落とすたくない」

フェネクスはナノコロナの熱を魔力に変換することで、虚数空間の外でも中距離間の魔力通信や、魔力をドーム状に展開することで一定範囲内のあらゆる情報を瞬間的に観測できる広域探索魔法「エリアサーチ」を使用できる。

理論上無限の熱量を出せるナノコロナとはいえ、バイクの燃料としても同時利用する場合は、出力の安定を測る上でも迂闊に範囲を広げられない上、情報の更新は発動した瞬間のみでリアルタイムの観測は出来ない為、バイクの移動をより安定させる使い道が主である。

『今から探してもあんまり成果はなさそうだね』

「万全に事が運ぶことが稀だろう」

『転移魔法が使えたらなく。昔は良かったなあ、このぐらいの距離は

パパツと移動できたんだよ?』

フエネクスの懐古的愚痴を聞き流しながら、話題に出た魔法について考える。

かつて超常と呼ばれた現象が科学によって解明・再現が可能となった現代。その最たる例として、神の存在があつた。

フエネクス曰く、古代の生活の基盤にさえなつていた神への信仰は、人口の増加や文明の発達により次第に希薄になり、現代では遂に表に出ることはなくなった。

人間の生は須らく人間のみの力によって保証できる。

神なんて存在しないし、魔法なんてものは空想の産物でしかない。科学の発展を極めたことで人類がそのような幻想に縋らずとも生きていけるようになった。

誰もが目の前の現実幸福を見出すようになり、見えざる手に見向きもしなくなったことで、その存在は次第に希薄になっていったが、事実として幻想だと思つていた事象は確かに存在していたのだ。

魔法と呼ばれた超常も地球上に確かに存在していた。それを行使するための燃料として、大気に満たされていた魔力を運用していたという。

その魔力の源泉たるは信仰。超常が当たり前に存在するという認識が、世界に超常が存在することを許していたのだと。

そして、その信仰を受信した神の力によって、魔法が現実のものとなつていたらしい。

かつては神の方が優れていたが、人間が文明を発展させていくに連れて、神の時代は過ぎ去り次第に人間が地球上のヒエラルキーの頂点となつていった。

指数関数レベルの人口の増加は、個々の脆弱性を補つて余りあるほどの多様性と可能性をもたらし、遂には神さえも否定するに至つた。

人間が上位者となつたことで、人間の認知は神の存在までも塗り潰してしまった。

神が存在しなくなった世界で、魔力が存在出来るのは虚数空間のみで、稀にナノコロナのような膨大なエネルギー物質から絞り出すこと

は出来る程度。

この世界に、最早超常の居場所はない。

——ならば、目の前にいる人語を介する火の鳥は何者なのだ。

超常が否定されているならば、何故そんなものが現代に存在し得るのか。

そんな奴が生み出す魔法少女とは一体何なのだ。

当然追及した。しかし、答えは「わからない」の一点張り。

どれだけ強く問い正しても、答えは変わらず。真に知らないのか、言えない理由があるのか。

なんにせよ、これ以上は無駄である。この話題はそれっきりだ。

正直な話、神や魔法が存在したあの、どうでもいい。

知的好奇心に駆られるが、興味の延長でしかなく、知っても知らずともどうにでもなる内容だ。

無い物強請りは出来ない。魔法であれ科学であれ、どちらにも優劣足り得る要素はあるだろうし、一概に上位互換であるということは考えられない。

イマジナリの討伐は魔法少女でなくては出来ないように、今ある技術で事を為すしかないというのが代えがたい現実であり、普遍的で論理的な考えだ。

『あ、見えてきた』

市街、郊外と抜けてしばらく走り抜けた先、終焉災害によって破壊された残骸に足を取られつつも辿り着いたのは、子供用の玩具を販売していた大型店。

比較的自分達の拠点から近いこともあってか、終焉災害による被害はほぼ見受けられず、単純な野ざらしによる風化が目立つ程度で、やろうと思えば野宿も可能な程度には状態が良い建物だ。

食料品店等は終焉災害が始まった当初に粗方荒らされ尽くしており、今では瓦礫のみが残る無法地帯でしかないが、こういった生活に直接根差していない物に関しては、今でも現存している可能性はある。

しかし、長らく放置されていたこともあり状態が良いものを見つけ

るのは困難を極める。だからこそ、この仕事に価値が付く。

「エリアサーチ展開」

『はい』

魔力がフェネクスを中心に波紋のように広がる。

店内の構造を確認すると同時に、先客や野生動物が居るかどうかを確認する。

野生動物に関しては可能性は低いが、生存していた場合飢餓と野生回帰の相乗効果で襲われる可能性が非常に高い。

それよりも最も恐ろしいのは人間だ。

好意的な接触が出来れば理想だが、そうであることは非常に稀だ。

地上に住んでいる人間は、椅子取りゲームに負けた敗北者が殆ど。望んでその権利を得た訳ではない。

そんな人間が、毎日災害に怯え、飢餓に喘ぎ、それでも死にたくないと必死に生き足掻いているならば、現状への不平不満が溜まるのが当然。

自分が恵まれていれば施しを与えられるのが人間ならば、そうでなければ奪う側に回ることを辞さないのもまた人間だ。

人間が外道に走らないようにするために法律が存在するのであり、一皮剥けば人間など十把一絡げに自分本位の塊だ。

善意も悪意も、究極的に言えば自己満足へ帰結する要素でしかない。

『うん、悪性反応はなし。当然だけど生命の気配もないよ』

フェネクスの返答を聞き届け、速度を上げて建物へ接近する。

近くで見れば、想定よりも損壊の少ない建物に中への期待が高まる。

『結構近場にあったのに、今まで見落としてたなんて勿体ないね』

「玩具売り場の、ましてや前時代なものともなれば、足を運ぶこと自体が無駄だ。不要な物を抱えていてもかさばるだけだ」

『だからって毎度後手後手なのもどうかと思うけどなあ』

「俺は商人じゃない、運び屋だ」

相変わらずの小言を漏らすフェネクスに辟易しつつも、建物に入

る。

やはりと言うべきか、外壁の損壊度を思えば及第点な保存状態に足取りが無意識に軽くなる。

今の時代、玩具というのはAIを搭載した自律型ロボットだったり、フルダイブ技術による第二の現実として没入するゲームが普及していることもあり、子供も大人も娯楽に対する感性に大きく違いはない。

しかし、それらは当然として電気な設備があつてこそ成立するものであり、この崩壊した環境下ではそれを望むべくもない。

『それじゃあ、僕はあつちを見てくるね』

「好きにしろ」

まるで秘密基地を見つけた子供ののような浮足立った様子と共に、フェネクスは奥へ奥へと進んでいく。

フェネクスが奥を探索するならば、自分は入り口からじつくりと探索できる。

エリアサーチは物質の性質などを判別できるほど精度の高いものではない為、物資調達はどうしても自身の目と足が求められる。

そういう方向性の魔法はないのかと聞いたことがあるが、存在はするが属性が異なる為に無理だと言われた。

フェネクスはその名の通り不死鳥としての性質も持ち合わせており、契約した者に治癒や生命力を増やす力を与えることが出来る。

本来の契約者——妹の飛鳥ならば、生命力を操作して傷を癒したり、それを他者に行えるなどと言った利便性の高い魔法を得意とする魔法少女となっていたらしいが、非正規の契約によって生まれた偽りの魔法少女である俺では、属性の解釈が捻じ曲げられているのと、

その結果が『再構成』——非生命体に限定した、分解からの再生という荒療治と言っても差し支えない強引な治癒ということである。

扱える魔法の性質は使用者の精神の在り方にも左右されるようで、フェネクス曰く俺が常人では考えられないレベルでひねくれているから、このような真逆の性質になったのではと言われたことがある。

生憎とそれが功を奏している現状において、そのような言葉など痛くも痒くもないし、故に顧みるつもりもない。

そもそも、ひねくれているからなんだと言うのか。

四六時中斜に構えた態度を表に出しているならばいざ知らず、商談等においてそれを露呈させるようなことはしていない。この性格を知っているのは、今ではフェネクスぐらいしかいない。

それに、他の人間も多かれ少なかれ同じような思考に行き着いたこととはある筈だ。

他人の思考を覗くことは出来ずとも、この考え自体は普遍的なものだ。

それが社会通念においてや人間関係構築において不都合足り得るからこそ、誰もがそれをひた隠す。

どれ程に優れた人間であっても、群を超越することは出来ない。どのような考えを持っていても、それが社会にとって不都合と解釈されれば潰される。

だから隠す。結果が分かりきっているのにそれでも敢行するような人間は、ただの狂人でしかない。

俺はその社会の在り方は一切間違っていないと考えている。いつだって大きく物事を変えようとするのは、過激な思想を持つ人間だ。その考えの善し悪しに関わらず、その過程で社会は大きく乱れる。そして、そういう輩はその過程によって与える被害など欠片も考えてはいない。

奴らにとって自分の考えこそ絶対正義であり、だからこそ何をやっても許されると考えているからこそ、急激な革命を求める。

更に言えば、そういう輩の大半は大層なお題目を掲げておきながら、本質は独善塗れの自己満足の塊であるが故に簡単にボロが出る。面倒なことに、社会的に抑圧されている民衆にとってそういった過激な思想は魅力的に映るものらしく、その流れに乗ってストレスを発散しようと企む者も一定数存在する。

例え出発地点が誰もが認める素晴らしい思想であったとしても、思想に共感した者達が増えていくことで組織化し、いつしか歪んだ解釈

を掲げる者が現れる。

かつて宗教としてはメジャーであった聖書の言葉でさえ、魔女狩りという悪辣極まりない結論に行き着く者を生み出してしまうのだから、さもありませんかと言いたくない。

個が如何に優れているようにも、群になれば凡夫となるのが人間であり、だからこそ俺は他者と必要以上に接触することを拒む。

他者との接点が増えれば増えるほどしがらみは増えていき、雁字搦めになる。無能な足手纏いを足枷にされるようなことは損にしかない。

ましてや、そんな弱い他人の為に尽くすなんて、救いようのない馬鹿としか言いたくない。

そう考える度に、脳裏に浮かび上がるのは幸節結花の姿。

この思想の対極を行く奇特な女。この俺を以てして、あの善性は認めざるを得ないと思わせた例外。

陳腐ではあるが、彼女という存在は地獄に仏と呼ぶに値するだろう。或いは、地獄に居るが故に仏に見えるだけか。

平時であればいずれ埋没する善意の行いも、今の世の中では神の如き所業とさえ映るだろう。

そして、人間は神という偶像を利用して私利私欲を満たす生き物でもある。彼女の行いが広まっていけば、いずれ仇として返ってくることは目に見えた。

人間は、失敗しなければ後悔できない愚鈍な生物だ。——否、失敗しても滅多に後悔できない、であった。

仮に後悔してもそれらは大抵刹那的なもので、時間の経過と共に感情が風化していく。そういう風に人間が作られていることは理解している、その結果人間は過ちを繰り返してきた。

人は歴史に学ぶなどと語る輩もいるが、真にそれが適応されるのであれば、文明はもつと早急に発達しているし、戦争や貧困によって命を落とす無辜の民はもつと少なかった。

学習能力という点においては、人間は機械に何世紀も前から敗北している。

今でこそ文明は滅びの一途を辿ってはいるが、もし順風満帆に科学が発展し続けていけば、人間が機械に管理される未来とやらも笑い話では済まなかつたことだろう。

感情や欲望によつて他者が人を害する事例は枚挙に暇がない。

ひと昔においても、未成年が一度悪意に手を染めたにも関わらず、未成年であるという理由で軽々しく罪を軽くした結果更なる悲劇を引き起こしたなど、考えるまでもない結論が出て騒ぎになった事例などが幾らでもあつた。

それでも、少年法が改められるまでは長い時を有した。やれ子供だからの可哀想だの、そんな感情で語る民衆の声もあれば、改善されると不都合となる政治家の横槍で遅々として話を進ませない等、まさに感情や欲望が間接的に加害者となつていくケースだ。

間接的であるが故に明確に罪には問えず、間接的であるが故に痛みを伴わず同じことを繰り返す。

反省も後悔も痛みを知ろうとも時間の経過で摩耗する代物ならば、痛みを伴わない行いには反省も後悔も訪れない。

ただの結果として解釈され、どのような結果であろうとも自分に非があるなどと考えず、自らの主張が通るまで延々と繰り返す。これが歴史の実態であり、そこから零れ落ちたプラスの結果にフォーカスを強く当てているせいで、真に表沙汰になるべき要素が埋没されてしまう。民衆が腐敗した王制を打倒したなどという美談ばかり表になり、実態が歯止めの利かなくなった民衆の暴走の果てに不必要な地獄を進み続けたフランス革命のように。

こんなものは所詮一例に過ぎず、規模を縮小すれば同じような事例など砂漠が出来るほどに存在している。

大衆にとつて、歴史なんてものは『かつてあつた出来事』でしかない。そこに何を見出すかは個々人によつて左右される以上、そこに強制力どころか規範とさせる力なんてものはない。

そもそも、歴史自体が勝者によつて飾り立てられた美談を数珠繋ぎにしているのだから、同じことが繰り返されるのも必然ではある。

年月にして二十年と少し。医療技術も発展し百歳生きること珍

しくなかった時代において、自分は青二才とさえ呼ぶにも値しない程度にしか生きていないが、それでも理解できることはある。

それは——どれほど時代を経ても、どれだけ技術が発展しようとも、それが人類の質を引き上げることには寄与することはなかったということだ。

だからこそ、俺は他人を信じない。そんな不確かなものに縋ってしまえば、いずれは破滅する。ギャンブルにしたって分の悪い賭けにも程がある。

自らが招いた破滅ならば納得もしよう。だが、他人の足枷でそうなるのは耐え難い。

今の生き方が理想であり、これからもそれが変わることはないだろう。

「……こんなものか」

思考を巡らせながらも、身体は自然と素材の回収も余念なく行い続けた結果、最低限の収穫を得ることは出来た。

素材そのものは意外と潤沢に残っていたが、吹き曝しによる経年劣化もあって実用に耐えうる状態を維持していた箇所はそこまで多くは無かった。

単一のカテゴリにおいて、必ずしもすべてが同じ用途に使用できる訳ではない。

牛や豚では味も栄養素も可食域も何もかも異なるように、肉と言うカテゴリひとつ取っても選択肢は枝葉が如く広がっていく。損壊している箇所を補うのは、限りなく同一の箇所でしか成立しない。

とはいえ、物資も娯楽も何もかもが乏しい時代だ。あり合わせのものであってもあの善人親子なら嫌味ひとつ言うことなく感謝することだろう。

しかし、それは悪魔の誘惑だ。妥協を覚えれば、いつしかそれが常態化してしまう。

それしか方法がなく、労力と対価に釣り合わないのであればいざ知らず、そうでないならば常に最善を求めべきだ。

ましてや、今回求められているものは食事のような生死に関わるも

のではない。ちよつとした小物レベルの玩具ならば猶更だ。

『か、凱虎！』

此方へと飛び立ちながら念話で話しかけてくるフェネクス。

ただの経過報告だけならば念話だけで事足りる。それはすなわち、何かしらの懸念材料が生まれたからと考えられる。

「何があった」

『え、えつと。エリアサーチ内に突然人間の反応が増えたんだ。それだけなら珍しいことではないんだけど——』

「早く言え」

『——その反応はエリアサーチの内側から突然観測されたんだ。普通なら効果範囲の境目から反応がある筈なのに』

「そうか。数は？」

『一人。移動速度は徒歩レベル。あの謎の反応以外に不審な点はないね。……いや、ちよつと待って。真つすぐこっちに來てる』

「何？」

前提として、まず一般人が外を歩いていることが珍しい。

俺と言う前例がある以上、絶対に無いとは言い切れない。しかし、それでも単体で行動するのは解せない。

物資が不足し、止むに已まれず外界に希望を求めて行動するとしても、基本は複数人で行動するのが基本だ。

敵は終焉災害だけではない。人間が逃げ潜むようになったことで、野生動物がかったの人間のテリトリーに足を踏み入れるようになってる。

終焉災害によって自然も荒れに荒れ果て、動物達も止むに已まれず新天地を探し求めるしかなかったのだろう。

人間にとつて、外は最早未開のジャングルに等しい。腹を空かせた肉食動物にいつ襲われるかもわからない、そんな環境に一人で行動するなど自殺行為にも等しい。

そして、そんな中で徒歩による移動。俺のようにバイクによる高速移動と騒音の二重構造で動物を寄せ付けないといった工夫をするには、人間一人はあまりにも身軽過ぎる。

何よりも、エリアサーチの反応傾向。フェネクスの言葉を信じるならば、文字通りエリアサーチの範囲外から瞬間移動したかのような反応だ。そして、その反応はこちらに近付いているという。

総合して、警戒すべき相手であることは間違いない。

『どうする、逃げる?』

「不審な行動を取るな。もし相手が明確な意図を持ってこちらに近付いているとすれば、それに気付いているという情報を相手に与えることになる」

現状、こちらは相手の影を辛うじて掴めた程度の情報しかない。

確認しようとすれば、そのタイミングから気付いていると疑心を与えてしまう。弁明する機会を与えてしまうこと自体がデイスアドバンテージとなる。

この建物以外に身を隠せる場所は無いに等しく、安全に離脱するのは不可能。

それに、その手段を取るということは、バイクを捨てるということに繋がる。

あれは変えの利かない特別性だ。あれがないとすべてが立ち往かなくなる。

外側はどつどもなるが、ナノコロナだけはどうにもならない。現状、二つとあれば奇跡と言える代物だ。決して失いたくはない。

「お前は適当に隠れている」

『凱虎は?』

「このまま作業を続ける。俺が呼ぶまで動くな」

『……わかった、気を付けてね』

俺に出来る最善手は、無害な一般人を貫くこと。

何を目的にこちらへと近づいているかは知らないが、下手な行動はそれだけでマイナスな結果を引き寄せかねない。

人格の善悪はともかく、不審であることに疑いようはないのだから、警戒するに越したことは無い。

もし相手が悪人ならば、相応の対応を取ればいいだけのこと。

規則的な砂利を擦る音が徐々に近付いてくる。

音に対して真正面に向かず、しかし視界の端に捉えられる角度でしやがみ込み、一足飛びで遮蔽物に逃げられるように足に力を溜めつつも自然な所作でジャンク漁りをする。

緊張を押し殺し、動揺を表に出さないように心を静めてその瞬間を待った。

”まさか、本当に人が居るとはな。嘘は言ってなかったってことか”

流暢な英語と共に現れたのは、ベリーショート黒髪を持つどこか愛嬌さえ感じる壮年の黒人男性だった。

望まぬ邂逅

思考を加速させ、状況を整理する。

まず、この黒人の男は邂逅一番に「まさか」と言った。という事は、俺がここにいるという情報を教えた何者かが居るということになる。

そしておそらく、この男は俺が英語を聞き取れる能力があると気付いていない。つまり、まさかに隠された意味を紐解いているとは認識していない。

「あー……、アイムジャパニーズ、ノットスピークイングリッシュ、オーケー？」

故に、まず一芝居打つ。

表情も外向け用の柔和なものへと作り替えながら、ゆっくりと男の正面に立つ。

人畜無害な青年の振りをし、相手の反応を見る。一人で生きていく以上、軋轢となり得る要因を排除する為の手段は幾つも用意している。

「おつと悪いねえ。つい母国語で喋っちゃまった。日本語にはまだ慣れてなくてよ」

おどけた様子で瞬時に日本語に切り替える。

慣れていない、と言ったが日本語は数ある言語の中でも難易度が高いものとして有名だ。

グローバル化が進み、他国の言語を履修するのが当然となっている時代ではあるが、習熟度に関してはどうしても個人差が出る。

俺ぐらいの年齢ならば他言語に疎くてもそこまで違和感はないが、男の外観年齢を鑑みるに、倍近い年齢差があると見ていい。

それを踏まえた上で、あの流暢な言語切替は慣れていないの一言では済ませられない。

謙遜の可能性もあるが、謙遜は日本人特有の文化だ。

英語圏の人間は日本人から見てノリが良く、時には軽薄にさえ映る。しかしそのような認識は、文化の差異から来る情緒でしかない。

それを理解した上でそのような態度を取るならば、慣れていないと

いう発言は嘘と判断するに十分な証拠になる。

「……それで、どうしてこんな辺鄙な場所で一人で居るんだい？ 大の男とは言え不用心だろう？」

「仕事ですよ。それに、立場としては関してはお互い様では？」

「おっと、確かにその通りだ。んじゃあ折角だし、独り身同士仲良くしようじゃないか」

飄々とした態度に物怖じせずパーソナルスペースに侵入しようとする遠慮のなさ。どれを取っても俺が苦手とする手合いだ。

この手の輩は純粹に人柄が良いか、笑顔を隠れ蓑に腹に一物抱えているかのどちらかに該当する。

現状では判断に困るが、予想ではこの黒人は後者だ。そうでなければ、先程英語で呟いた内容が荒唐無稽なものとなってしまふ。

俺個人を狙い撃ちにしてか、単純に人が居るといふ事実のみを知つての台詞かは判然としないが、あの口ぶりから察するに第三者の情報提供者がいるのは間違いない。

そうだとして、その情報をどこで聞きつけた？

知ること自体は簡単だ。あの時の会話は個室で行われていたとはいえ、防音なんて贅沢な設備がある訳でもなく、聞き耳を立てれば盗聴は幾らでも出来る。

しかし、こんな目立つ見た目をしている奴がそんなことを堂々としていればバレない訳がない。だからこそ第三者の協力関係が濃厚になる。

次に、それをどう伝えるか。

このご時世、通信端末なんてものは貴重品を超えてガラクタでしかない。

何せ、通信網を中継する電波塔は終焉災害によって軒並み破壊し尽くされており、軍人が外で活動する際に情報共有を行うために用意される移動式の電波発生装置ぐらいいしかまず残されていない。

それも指向性を定めた上での限定的な送受信のため範囲は狭い上、運良くそれに乗つかれたとしても、そんな限定状況を踏まえた上で後出しで聞かされた俺個人の移動先からここまで徒歩で辿り着くなど、

果たしてどれだけの奇跡を重ねれば実現できるか。

そもそも、この周辺一帯に軍人が派遣されているという情報はしばらく聞いていない。

つまり、電波を使用した通信というのは可能性としてはゼロに等しい。

しかしそうになると、やはりこの男の発言に疑問が残る。それどころか何も解決さえしていない上に疑問が増えてさえいる。

気味の悪い存在を前にして仮面が？がれそうになるも、どうにか押し留めて友好的に接するべく気持ちを切り替える。

「そうですね、偶然とはいえこうして会ったのも何かの縁です。折角でしたら、情報交換でもしませんか？」

「おう、いいぜ。その前に、俺はアダム。アダム・ヘリックだ」

「……皇凱虎です」

互いに名乗り、握手を交わす。

一瞬偽名を名乗るべきか悩んだが、幾ら情報通信網が機能不全とはいえ、行動範囲の広い俺の身元など調べようと思えば充分に調べることは可能だと判断し、素直に答えることにした。

相手を知るうえで名前の交換は最も単純かつ合理的な手法だ。

名前は個人を特定するタグである。情報社会においては名前ひとつ特定するだけで性別や今までの経歴といった、ありとあらゆる個人情報に理論上は知ることができるといっては重要かつ普遍的な特定手段である。文明が崩壊し時代が逆行したところで、そこに込められた価値が揺らぐことはない。

名前の交換はコミュニケーションの基本であり、それは日常の交流に始まり、そこからビジネス等のより厳粛さが求められる環境になればなるほどに重要になってくる。

例えば織田信長。天下統一を前に明智光秀に謀反を起こされて本能寺にて逝去、ぐらいいは調べようとせずとも知る機会がある程度には有名な戦国大名だが、いざ織田信長を深く調べようとする途端に膨大な情報量を前に眩暈を起こすことになるだろう。

彼の波乱万丈な人生の歴史に始まり、彼が人生で関わってきた人物

との繋がりが相関図となり、芋蔓式に彼以外の人物の情報も開示されることとなる。

これはほんの一例でしかないが、織田信長という個人にはそれほどの情報が込められていることは理解できるだろう。

しかし、情報量が多いのは彼が偉人だからではなく、あくまでも歴史書に名を残すほどの存在だった故に回顧録としてその生涯を刻まれているだけであり、彼と同年齢の人物であり同じ数の人間と交流をしていたならば、内容の密度に違いはあれども量だけで言えば充分比肩するレベルになり得るのである。

今や個人情報とは生誕の際に与えられ管理されるひとつの特別なアカウントによつて統括されており、それ以外の第二第三のアカウントを所有することは違法とされている。

かつては複数アカウントによる匿名性を利用したネットワーク上の悪事の一切が許されなくなり、何をするにおいても個人情報の紐付けが必須になった代わりに、今まで無法地帯だったネットワーク内の健全化が一気に促進された。

やれ管理だ監視社会だと揶揄する者も一定数存在したが、小説等で挙げられがちなディストピア社会などとは比べ物にならないぐらい人権に配慮された健全な統制が為されており、ネットワーク犯罪なども9割消失したことで肯定派がほとんどである。

個人情報保護法の観点から一般人には開示されないが、政府クラスならば名前ひとつ調べれば市民の情報なんて簡単に調べることが出来る。

だが、今や文明は崩壊し、同時に秩序もかつてと比べるまでもないほどに混沌としつつある。

個人情報もどこから漏れたところで不思議ではないし、ネットワーク社会に依存しすぎていたせいで、それありきとなっていた管理体制と犯罪抑止力は大いに弱体化。今や悪行を取り締まれる力は政府に強く期待できない。

人の口には戸が立てられない。アナログな交流が主体となったことで情報の扱いも無秩序となり、そうなれば俺が運び屋として色んな

人間と交流してきたことが裏目となり、簡単に足が付くなんてことは前提とすべき考えだ。

「まず俺からいこうか。とはいえこっちに来たのはつい最近で、こっちの事情は何も知らねえんだ」

「では不躰ですが、こちらへと来た理由をお伺いしても?」

「大した理由じゃねえよ。妻子に先立たれたから、独身貴族を満喫中ついでに旅でもしようってな」

本当に大した理由ではなかった。

今の時代、老若男女問わず明日を拝めない人間なんて腐るほどいる。

病気、飢餓、暴力——かつて平和で安寧を極めた世界は、一転して地獄へと変質した。

故に、彼の境遇も本当に大した理由ではない。明日は我が身、同情したところで慰めにさえならない。

「正直二人がこの世に存在しないと理解してからは、潔く俺も後を追おうと考えた。俺にとっての世界は二人で、なら生きていても無意味だと割り切ってたな」

「でも、貴方は生きている」

「・・・そうだな。生きなくてはいけない理由が出来た。俺の世界はまだ失われていなかったんだと知ってからは、せめて二人が生きて成し遂げられなかったことを受け継ぐことが弔いになると思った。それだけよ」

アダムは懐からおもむろに煙草を取り出し、噛み締めるように吸う。

煙草は嗜好品の中では基本的に価値が低い。食料のような生存に必要なものではない上に、品質さえ考慮しない前提ではあるが、作り方と素材の調達さえ出来れば意外と簡単に作れるからである。

当然法律で禁止されてはいるが、そんなものを遵守する者もいなければ、取り締まる基盤もありはしない。

それどころか、生死に関わる案件であろうとも基本的には自己責任。余程の大規模な被害が出ない限りは政府も動くことはないだろ

う。

大事の前の小事、人も資源も不足している以上、最大限に効果を發揮するタイミングに投資しないと共倒れにしかない。

それよりも気になった点としては、そんな煙草の外観が手作りとは思えないほど綺麗だった部分にある。

確かに煙草は自作が出来る点から価値は低いとされているが、機械による量産品に関しては別である。

自作出来る程度の煙草の品質など程度が知れる。

世間一般的に機械による量産品と聞けば数を優先した結果からの安価で淡白なイメージが強いが、寸分変わらず品質を保証する技術と、その品質に裏打ちされた物資の潤沢さを鑑みれば、そこに至るまでに掛けたコストが途方もないことぐらひは馬鹿でも理解できる筈。

価値が低いと言ったが、あくまでも一般的にはであつて、価値の解釈は人それぞれ。

過去にも壺や絵やらに巨万の価値を見出す好事家みたいな物好きが居たように、こんな時代であつてもこだわりを持つ狂人が勝手に付加価値を付ける。

そして、そんな狂人に売りつければわらしべ長者よろしくより高いグレードの物資を得ることも不可能ではない。

アダムが煙草を味わつて吸っているのは確かだが、封を切る行動に一切の躊躇がなかった。

堂に入った姿勢から見て吸い慣れているように思えるが、ならば量産煙草の価値は多少なり理解がある筈。

しかし、アダムは躊躇うことなくビニールで封をされていた新品を開封し、その中の一本を口にした。

今や機械で作られた量産の消耗品とて、そのようなものを作ることが難しくなつた今では、骨董品としての価値さえ生まれてくる。

人によつては、アダムがした行為は億万の価値のある骨董品にベタベタと手垢を付けるに等しい悪徳でさえある。それが理解できないほど彼は若くもなければ老けてもない。

酸いも甘いも噛み締めた人生経験豊富な雰囲気纏う偉丈夫が、そ

の思考に至らないとは考えにくい。

——ならば、彼にとってあの煙草はそうしても問題ない程度には入手が容易なのかもしれない。

それはすなわち、東京への伝手がある可能性への足掛かり。

終焉災害以降、選ばれた者しか訪れることが許されなくなった、唯一無二の生き残った都市。

閉じた楽園と化したそこから、我々はお零れを預かることで糊口を凌いでいる。

誰もが享受していた恩恵は、今や誰もが夢見る理想郷への変遷している。

それは皇凱虎にとっても例外ではない。

だがしかし、それは自ら楽園に入りたいという欲からくるものではなく、運び屋として流通ルートを確保できれば色々と捗るというだけのものに過ぎない。

仮に想定が外れたとしても、そこで終わる。あくまでも仕事が楽になるというだけで、無いなら無いでどうとでもなる程度のものでしかない。

もしもの話、俺が楽園に永住することが出来てしまえば、間違いない俺は死ぬ。

正確には廢人になる、だ。

生きる原動力が失われれば、たとえ肉体が安寧であろうとも精神が崩壊する。それは、死んでいるのと何ら変わらない。

生きることには必要がなくなれば、人は確実に墮落する。

墮落の先に執着する何かを見いだせればともかく、俺にそんな高尚なものはないし欲しいとも思わない。

全く労働が無いとは言わないにしろ、現状を思えば圧倒的に幸福な環境であることに異論を挟む余地はない。

家族を失い、運び屋なんて無駄に過酷な環境に身を置く必要もなくなるとすれば、最早俺の人生を縛るものはない。

故に、望まない。果たして無意識か理性によるものかは本人でさえも判然としていないが、何にせよ理性を失うほど執着する理由はない

ため、あくまでも可能性として胸の裡に留めておく。

——ふと、脳裏に一人の女性と少女の姿が過ぎった気がした。

しかし、間髪入れずに差し込まれたアダムという言葉と共にそれは霧散する。

「悪い、湿っぽくなったな。まあ、昔は落ち込んでたけど今は元気だから気にするな」

別に気にしてなどいなかったが、アダムからはそう見えたのだろう。ならばいちいち訂正する理由もないと、無言で首を振って答える。

それにしても、先の会話は初対面の相手にする話題とは思えない。

幾ら日常的に不幸がありふれているとはいえ、それを冗談めかして語れるほど人心が荒んでいる訳ではない。

誰も彼もが絶望に染まり切っているのではなく、それでもとかつての栄華を取り戻そうと虎視眈々と機を伺っている者達も、運び屋の業務の過程でたくさん見てきた。

希望と絶望が鬩ぎ合っている状況下でそんな発言をしようものならば、それだけで非難轟々の嵐が吹き荒れることも有り得る。

仮に彼が何かしらの悪意を持って絶望を後押しせんとこんな話題を振ったとして、それにしても内容は粗末だし、何よりも扇動したいのならばこんな荒野に一人だけの相手にするのは効率が悪すぎる。

確かに扇動の主犯として目立ち難いのと、俺が運び屋として各地を移動している事実を知ったうえで広範囲での拡散を狙ったのだとしても、やはり非効率的かつお粗末としか言いようがない。

「それでカイトは仕事って言ったが、軍人って訳でもなさそうだし、一般人が何の用でこんな場所に来たんだ？」

教える義理はない、が頑なに説明を拒む理由もない。

しかし、感情論としては許容し難い選択でもある。

はつきり言ってみず知らずの相手に身の上話などしたくもないどころか、会話に限らず関係を持つことすら億劫だ。

色々と都合が良いから運び屋なんてものをやっているだけで、他者と関わらない自己完結した生き方が出来るならそれが理想であり、そ

んなジレンマの中日々を過ごすのはストレスでしかない。

とは言え、下手に誤魔化すと要らぬ猜疑心を植え付けることになりかねないし、合理性を鑑みれば素直に話すのが得策なのは間違いない。

「・・・運び屋、という奴ですよ。要求された物を探して、その対価を得る。ただそれだけの利害の一致の延長で、特別なことは何も」

「手に職を着けているだけ立派だと思いがね。今の時代、配給や自給自足といった形で食い繋ぐのが当たり前。最低限の周囲への配慮さえあれば生きることぐらいは出来る。逆に言えばそれ以外に關しては度外視で、文字通り生きていくだけの奴らばかりが量産されちまっている。お前さんは、きつとそんな奴らの希望たり得ることをしている。卑下することはないさ」

美辞麗句をつらつらと並べるアダムに、よくもまあ口が回ると冷めた感情で眺める。

他者にとつての希望だのなんだの言われても、そんなの所詮は受け取る方の理屈でしかない。

善悪なんてものは所詮表裏一体で、誰かの幸福は誰かの不幸へと繋がるのが常である。

ましてやそれが、過去の遺物と化した限られた資源が関わっているならば尚更。

目に見えないだけで、社会に属する限り人間は生きていくだけで他者の不幸を土台にして生きるしかない。

完全自給自足であったとしても、資源そのものが瞬間的にも消費されているからには、それを欲する者にとつては貴重な資源を独占する悪者となる。

常識的に考えれば、そんなものただのクレーマーどころか当たり屋に等しい言い掛かりなのだが、常識が通用するかどうかは常識を語れる程度の相手と状況が揃って初めて成立する。

それは知識という意味だけではなく、常識を語れる程の余裕があり、かつ法律が正しく機能する健全な環境かどうかという点だ。

倉廩満ちて礼節を知るとい言葉があるように、常識を語らせたい

ならば相手側の環境が精神が健全であるかが肝要となる。

加えて、その最低限のラインは個人によつて大きく左右される。ましてや、数年前までは保証されていた安寧な人生が奪われてしまったのだ。一度知つた甘い蜜の味が忘れられないならば、常に飢餓感に喘ぎ苦しむことしか出来ない。

飢餓感が理性で抑えられなくなった瞬間、人はどこまでも残酷になれる。足らぬ足らぬと食い散らかす餓鬼となり、悪意を振り撒くことになる。

俺の行いはそれを助長するものであり、言わば他者の不幸を糧にしているに過ぎない。

別にそれが気になるなんてナイーブな考えは持ち合わせてなどいない。顔どころか存在すら知らない相手のがたれ死んでたとして、それが俺のマイナスにならないならば記憶に留まることなどないし、そもそも認識すら出来ないのがほとんどだろう。

ただ事実としてそうであるという自覚があるだけで、だからこそ出会つて間もない奴の慰めのような言葉なぞ耳に届かないというだけの話だ。

「そう、ですか」

とは言え、それを当然の理屈と言葉にするような浅慮ではない。

俺の考え方が一般常識とズレているのは分かりきつたことだし、だからと言つて己を曲げてまで周囲に迎合したいとも思わない。

故に、沈黙を以て事実を証明させないようにする。

上辺を取り繕い、最低限差し障りないコミュニケーションを形成し、細々と生きる。人生なぞ、そのくらいで丁度良い。別に本心を吐露したい相手もない。

そもそも共感されたいというのは、周囲の目を気にするが故の防衛本能であり、気にしないのであれば何の障害足りえない。

「……そろそろ移動しないとマズいな。流星にここらで野宿は御免だしな」

以降会話は弾むことなく、悪戯に時間だけが経過していった。

アダムはおもむろに立ち上がると、宣言通り移動支度を始める。

「お前さんはどうするんだ？折角なら一緒に行動したほうが互いに安全だと思うんだが」

「いえ、お構いなく。こちらは野宿も視野に入れて行動しているので、装備は潤沢にあります」

アダムは一考した後、そうかいと残念そうに肩を竦める。

安全などと宣っていたが、初対面の男に背中を預けるという選択肢にまるで危険などないと言わんばかりの、その何の根拠もない軽挙妄動な言い草が逆に癪に障る。

それとも、俺が何かしようとも対応できる自信あつての発言か。何にせよ不愉快ではある。

「じゃあな、またどつか安全な場所で会えたときは何か食いながら駄弁ろうぜ」

背中越しに手を振り、確かな足取りでアダムは立ち去った。

そこから時間を十分に取り、ようやくと言った様子でフェネクスを念話で戻ってくるよう伝える。

『もう、動かないでいるのって疲れるんだよ？まったく無駄に用心深いと思ったら』

「無駄かどうかは俺が決める。それとも、その検証のために負債を背負う覚悟を持って？」

『そういうことじゃなくて、もっと他人を信用する努力ぐらいしたらどうなのさ』

「信用とは積み重ねだ。一足飛びの信用など容易く崩れる砂上の楼閣でしかない。感情論で語りたのなら、その土台に立つ価値ありと判断できる相応の実利を提供してみろ」

『……バーカバーカ！シスコン！むっつり！』

論破されて幼稚な罵倒を飛ばすしかなくなった燃える鳥を無視し、バックパックの整理とともに更に時間を潰す。

アダムがどれだけ距離を離れたかは正確に判断できない以上、バイク移動という目立つ行動を取るのは下策。

徒歩と比べて速度は圧倒的であるならば、多少のタイムロスはいくらでも補填できる。

「それより、あの男は客観的に見て不審な行動を取っていたか？お前の視点からの意見も共有したい」

「……何もなかったよ。だから信用していいって言ったんだよ。それとも僕のことを不審な相手をそうとも知らせずにお近づきにさせようだなんてさせる、そんな薄情な奴とでも思ったの？」

「無いならいい」

『せめて聞かれてることぐらい返しなよ！』

「勝手に質問したのはそっちだろう。それとも俺のことを打てば響く木魚のような無機質で機械的な奴とでも思ったか？」

『少なくとも、嫌味や皮肉で何倍にもなって返すような木魚があつてたまるかとは思ったね』

「当たり前だ。そもそも木魚は喋らん」

『前提を！覆すんじゃない!!』

人間の肉体があれば地団駄を踏んでいたであろう、そんな光景を想起させるように上下に乱暴に飛び回るフェネクス。

打てば響く木魚は、むしろコイツにこそ相応しい称号だろう。

そもそも、コイツにそんな無駄なことをする理由がない。

発言こそ幼稚な要素が散見されるが、決して馬鹿ではない。むしろ知能という点では凡百の人間とは比べるべくもないスペックを有している。

人間とは異なる高次の存在ならば当然とも言えるのかもしれないが、生憎とそんな理由で忖度する気はない。

奴なりの理屈で語り、果たしてそれは正しいのかもしれない。

——知ったことか。正論が人を救うというならば、この地獄と化した世界をどうにかしてみせればいい。

俺は俺が信じた理屈と理論に従って生きる。

それをエゴと嗤うならば、その認識を押し付けることもまたエゴでしかない。

その選択の果てが破滅であろうとも、己の選択した結果ならば納得するしかない。

しかし、それが他者の意思に比重が寄った結果の選択だったとすれ

ば、間違いなくあらゆる後悔の念で支配される。

言葉では形容できない程に千々に乱れた感情を抱えて生きるのも、そんな感情を冥土の土産とするのも真つ平御免だ。

それはそれとして、フェネクスの反応は多少愉快であり、その反応を見たくてワザと雑に扱っている自覚はある。

別にフェネクスのことを嫌っている訳ではない。まるで母親のように口喧しくはあるが、本気で踏み込まれたくない領域には決して触れない機微はあるようで、その点において奴と共に過ごすことに不快感はない。

これでも奴との対話では、たまに妥協点を探っても良いと思えるぐらいには心を許している自覚はあり、だからこそ自分の中の線引はしっかりしようと徹底している。

親しき仲にも礼儀あり。どのような立場であろうとも相応の関係を見極めて行動しなければ、ある日突然関係性の破綻に繋がってしまう。

今のフェネクスとのやり取りも、傍から見れば喧嘩のように見えても実際はじゃれ合いでしかない。それが分かる程度には良い関係を築いている自覚はある。

「また出逢うことがあれば、少しは気に留めておいてやる」

あの男への疑念が晴れた訳ではないが、2度目となれば傾向と対策も取ることは出来る。

過剰に警戒した結果、相手に疑心を持たせるのは避けたい。

積極的に関わるつもりはないが、出逢ってしまったとして脇目も振らず撤退するほどではない。

ならば、この辺りが良い落とし所だろう。

『……まあ、カイトにしては上等かな』

「言ってる」

そんな他愛のないやり取りを繰り返しながら、世界が黄昏に染まり切った時間まで待機した。

「そろそろ問題ないだろうが、一応サーチエリアで確認するぞ」

「はいはいっ、と……。うん、それらしい反応はないね」

「ならんかい」

するや否や、バイクを隠した場所まで歩き出す。

当然ではあるが、荒らされた形跡もなく五体満足で鎮座しており、念のための確認をした後は直ぐ様跨りエンジンを唸らせる。

化石燃料を使用していない分静音性は高いが、まったくの無音とまではいかない。

あまり目立った行動は控えたい故に出来るだけ音を鳴らさない方向で行くとなると、速度はどうしても落ちてしまう。

街との距離はそこそこあり、徒歩よりは速くても速度を維持するならば帰れるのは夜も更けた頃になるだろう。

必然的にライトを点ける必要も出てくるが、夜はまともな明かりが無いのが当たり前であり、そんな夜目に慣れた状態ならば例え視界に入ろうともこちらの正体が露見するほど目が機能するとも思えないし、そこは大して気にしていない。

それはそれとして、視界が確保できない環境で荒野を疾走するのは、例え魔法のサポートがあるとしても些か無謀が過ぎた。

あまりにもアダムとかいう不審者を警戒するあまりに過剰に時間を取ってしまったことは反省すべき課題だが、今はそれに費やす時間も惜しい。

予想していた通り視界は徐々に闇に支配されていき、安全運転のため自然と速度が落ちていく。

自身の怪我もそうだが、今やこのバイクこそ自分の肉体以上に替えの効かない一点ものであり、幾ら魔法で補修出来るとはいえそんな貴重品を乱暴に扱うのは、真つ当な感性の持ち主ならば自然と精神がブレーキを掛ける所業だ。

——それこそ、そのブレーキを踏み抜くほどの事態に直面でもしない限りは。

『——ッ、カイト!!』

「ああ」

瞬間、荒々しい魔力反応が観測される。

これまで幾度と感じた、イマジナリ反応。

目視においては一切の変化は感じられないが、それはこの反応は脅威が現実^{イミテーション・ネリズン}に侵食しようとしている前段階であり、それを観測できるのは魔法の力を持つ我々だけだった。

——そう、だったのだ。

『嘘……結界反応?!』

『位相結界』は、虚数空間に潜むイマジナリに干渉するために魔法少女が張る結界であり、その内部ならば本来人間が入れない虚数空間に侵入することが出来るのと同時に、実体を持たないイマジナリに干渉することが出来るようになる。

虚数空間でイマジナリを討伐すれば、表層化する筈だった魔力は内部で霧散する。これが表に出れば、自然災害として人々を無差別に襲う現象へと変換されてしまう。

故に、その役目は唯一の魔法少女である俺が担っていた。

統計を取った訳ではないので絶対数こそ不明だが、フェネクス曰く「魔法少女の資質は希少であり、資質以上に自分のような魔法少女へと昇華させる存在は72体しか居ない」らしく、残りの精霊の所在こそ不明だが日本以外にも当然存在するため、世界規模で分散しているとなるとそれらが邂逅することは非常に稀である。

その筈なのに、なんだこの奇跡のような偶然は。

『……どうするの?』

フェネクスの問いはつまり、こういうことだろう。

接触するか、しないか。

「接触する」

ならば、躊躇う理由などない。

相手は子供だ。俺のようなイレギュラーが何人も存在するとは思えないし、敵対する理由もない以上、接触するメリットの方が圧倒的に上だ。

そもそも、非接触を選択したとして中に居る魔法少女が敗北した後^{イミテーション・ネリズン}に侵入し、時間切れになるなど笑い話にもならない。

加えて、俺は決して子供が死地に赴いて見てみぬ振りを当たり前に出来るほどの鬼畜外道ではない。余程の理由が無い限り、手を差し伸

べるぐらいの良識は持ち合わせている。

優先順位を履き違えてはならない。別の魔法少女の接触が予定外であろうとも、やること自体は何ら変わらない。

結界反応のある力場周辺まで近づき、バイクを降りると共に魔法少女の——妹の姿へと変身する。

反応のある地域は、依頼主である幸節家族が住む場所と近く、自宅との距離もそこまで離れていないとなれば尚更見過ごすことなど出来ない。

一呼吸置き、飛翔とともに結界へと侵入する。

思えば、外から結界に侵入するなんてことは初めての経験であり、安直に突っ込んだのは下策だった。

結果的にすり抜けるように入ることが出来たが、激突して落下などという無様を晒すことも有り得たのだから。

予想外の連続もあり、冷静であれと努めているつもりが実際はそうでもなかったのだと自らを省み、反省を促す。

気持ちを新たに結界の中心部まで移動し、遂に目標を補足した。

「——な、に？」

それを見て、言葉を失った。

イマジナリを見てではない。

見間違える筈もない。そこに居た魔法少女の姿が、今日の朝出逢ったばかりの少女。

幸節結花の娘である、幸節蘭が震える身体でイマジナリと対峙している光景を目の当たりにしたからだった。